

令和6年度

講義要項

経営学研究科経営学専攻

博士前期課程

埼玉学園大学大学院

成績評価について

〔成績評価の方法〕

授業科目毎の成績評価方法は各科目のシラバスに記載されています。評価項目ごとに配点比率が明示されていますので、確認してください。

〔成績評価の内容〕

成績は、「S」「A」「B」「C」「D」と表記されます。このうち「S」「A」「B」「C」は合格です。合格と判定された科目には所定の単位が与えられます。「D」と表記された科目は不合格ですので単位は修得できません。具体的な評価内容は以下のとおりです。

素点	100~90	89~80	79~70	69~60	59~0
成績通知表	S	A	B	C	不可
成績証明書(和文)	S	A	B	C	表記しません
成績証明書(英文)	S	A	B	C	表記しません
合否	合 格				不合格

※ 令和4年度までの成績評価で、素点が90点以上だったものは「S」として取り扱います。

目次

経営学特論（工藤 悟志）	1
経営組織論特論（文 智彦）	2
医療経済特論（一戸 真子）	3
ヘルスケアサービス・マネジメント特論（一戸 真子）	4
労務管理特論 ※本年度休講	5
地域企業論特論（塩谷さやか）	6
国際経営特論（工藤 悟志）	7
マーケティング特論（水野はるな）	8
経営史特論（張 英莉）	9
アジア経済事情特論（張 英莉）	10
会社法特論（高橋 均）	11
財務会計特論（篠原 淳）	12
管理会計特論（藤井 博義）	13
国際会計特論（篠原 淳）	14
会計監査特論（笠井 浩一）	15
簿記特論（大塚 浩記）	16
経営財務特論（福永 肇）	17
租税法特論（佐藤 正勝）	18
法人税法特論（川原由紀人）	19
所得税法特論（會田 耕児）	20
相続税法特論（香取 稔）	21
消費税法特論（森田 修）	22
国際租税法特論（佐藤 正勝）	23
環境会計特論（劉 博）	24
金融論特論（花崎 正晴）	25
国際金融論特論（秋場 勝彦）	26
貨幣論特論（藤井 大輔）	27
証券市場特論（鯖田 豊則）	28
リスク・マネジメント特論（冨家 友道）	29
研究指導Ⅰ・Ⅱ（花崎 正晴）	30
研究指導Ⅰ・Ⅱ（一戸 真子）	31
研究指導Ⅰ・Ⅱ（佐藤 正勝）	32
研究指導Ⅰ・Ⅱ（塩谷さやか）	33
研究指導Ⅰ・Ⅱ（張 英莉）	34
研究指導Ⅰ・Ⅱ（福永 肇）	35
研究指導Ⅰ・Ⅱ（文 智彦）	36
研究指導Ⅰ・Ⅱ（藤井 大輔）	37
研究指導Ⅰ・Ⅱ（水野はるな）	38
研究指導Ⅰ・Ⅱ（工藤 悟志）	39
研究指導Ⅰ・Ⅱ（篠原 淳）	40
研究指導Ⅰ・Ⅱ（秋場 勝彦）	41

授業概要

経営学特論では、企業経営の根源的な問題の一つである「経営と倫理」の関係をテーマとする。本講義におけるアプローチは、日本の代表的な企業者を取り上げて、その倫理思想を中心に検討し、資本主義の発展過程において企業倫理の問題がどのように議論されてきたのかを考察する。本講義で取り上げる企業者は渋沢栄一とする。

授業計画

第1回	ガイダンスー講義計画ー 経営倫理について
第2回	経営倫理とは(1)ー企業と社会ー
第3回	経営倫理とは(2)ー企業の不祥事ー
第4回	経営倫理とは(3)ー企業統治のあり方ー
第5回	渋沢栄一の事績と思想
第6回	渋沢思想の淵源(1)ー渋沢思想の基礎的考察ー
第7回	渋沢思想の淵源(2)ー徂徠学・水戸学の正名論ー
第8回	渋沢思想の淵源(3)ー論語講義の儒学的分析ー
第9回	渋沢思想の淵源(4)ー渋沢思想とヴェーバー理論ー
第10回	渋沢思想の淵源(5)ー論語と算盤ー
第11回	渋沢栄一の経済思想(1)ー自由主義経済思想ー
第12回	渋沢栄一の経済思想(2)ー田口卯吉との対立ー
第13回	渋沢栄一の経済思想(3)ー渋沢の商業擁護論ー
第14回	渋沢栄一の経済思想(4)ー合本主義への道程ー
第15回	演習のまとめ
第16回	定期試験

到達目標

本講義では、「経営と倫理」に関する知識を高度なレベルで修得することを到達目標とする。これにより、いかなるテーマで修士論文を作成する場合でも、経営について倫理的側面から検討を加えるにあたって必要な知識と、その応用を可能ならしめる力量を蓄える。

履修上の注意

対面授業形式で行う。第5回講義までの資料表紙には、資料内容を理解するうえで重要なキーワード、課題レポートの「テーマ」、「提出期限」、「分量」などを明示する。課題レポートはワード形式で提出すること。講義資料の末尾には必要に応じて「まとめ」と「参考文献」を表示する。第6回～15回講義は参考書の各章を読み込み、指定するテーマに基づいて毎回レポートを提出すること。参考書は受講者が入手すること。

評価方法

毎回の講義で指定するテーマに関する課題レポートの評価を60%加味する。期末試験は全講義を通して学んだ内容に基づいた論文作成を課し、その内容評価を40%加味する。

テキスト

参考書：坂本慎一『渋沢栄一の経世済民思想』（日本経済評論社、2002年）。

授業概要

本特論では、経営組織論を研究する上で必須の基本的な理論・学説を講義する。
 組織における人間行動を理解するために、個人の問題やグループの問題、組織構造、職務設計、組織変革などを中心に講義する。

授業計画

第1回	概要
第2回	組織における個人の行動
第3回	パーソナリティと感情
第4回	モチベーション論の基礎
第5回	モチベーション論の応用
第6回	個人の意思決定
第7回	組織における集団の行動
第8回	チームの理解
第9回	コミュニケーション
第10回	リーダーシップ
第11回	権力と政治
第12回	コンフリクトと交渉
第13回	組織構造
第14回	組織文化
第15回	組織変革
第16回	総括

到達目標

本講義は、経営組織論について体系的に理解しかつ批判的視点から理論を考察するための基本的な知識を習得することが目標である。

履修上の注意

事前に文献を読み理解し、授業内では積極的に議論に参加することを求める

評価方法

ディスカッション・プレゼンテーション・レポートにより評価

テキスト

授業内で紹介

授業概要

病院の起源に近い施設等は多くが教会や寺院によるものであり、病気の治療や療養など、病んでいる人々や苦しんでいる人々を救済するものであったが、今日では、医療は巨大な産業となっている。サービス提供側の病院建設費用、医療機器、電子カルテどれもが高額であり、サービス消費側も多くの場合、保険システムを活用し医療費を支払っている仕組みとなっている。社会保障費全体に対しても医療の占める割合が大きい。多くの薬品や医療材料などがグローバル市場であり、またメディカル・ツーリズムに代表されるような国内にとどまらないヘルスケア商品が市場に出てきている。本講では、健康・保健・医療・福祉・介護を含むすべてのヘルスケアの分野において、経済学的アプローチがどのように重要であるかについて講義する。すべての人々が健康で質の高い保健医療サービスを受けることができるようにするにはどのような市場が望ましいかについても理解を深められるよう講義する。さらに、今後益々競争が激化する医療のグローバルビジネス戦略についても講義する。

授業計画

第1回	医学史から見た医療経済
第2回	社会保障と国民医療費、公費負担医療、保険料と患者負担
第3回	医療サービスの特殊性
第4回	医療技術評価 (HTA: Health Technology Assessment)
第5回	費用対効果
第6回	根拠に基づく医療 (EBM: Evidence Based Medicine)
第7回	意思決定を市場に委ねるメリットとデメリット
第8回	効率性 対 公平性
第9回	診療報酬制度、介護報酬制度、薬価制度、混合診療、自由診療
第10回	出来高払いと包括払い、DPC、ホスピタルフィーとドクターフィー
第11回	医療費抑制の仕組み
第12回	患者・利用者満足度、職員満足度
第13回	幸福の経済、加齢の経済、福祉レジーム
第14回	メディカル・ツーリズム
第15回	ナッジ
第16回	期末試験

到達目標

- ① 医療サービスの特殊性と経済の関係について説明できる。
- ② 医療技術評価の世界的潮流について説明できる。
- ③ 診療報酬のあり方を含め、医療サービスとコストとの関係について説明できる。
- ④ アウトカムと経済性について分析できる。
- ⑤ 患者の意思決定と市場の関係について考察できる。

履修上の注意

医療費の増大や薬価の高騰等の問題も含め、できるだけ身近に感じていただきたい。
予習・復習各 90 分程度。

評価方法

レポートおよび発表 40%、試験 60%

テキスト

大竹文雄・平井啓編著 『医療現場の行動経済学』東洋経済新報社 2021年

授業概要

世界中のどんな人々もできるならば最善のヘルスケアサービス（ベスト・プラクティス）の提供を望んでいるはずである。本講では、ヘルスケアサービス提供分野においては、ベスト・プラクティスを目指すためにどのようなマネジメントが必要であるか、またベスト・プラクティスに影響を及ぼす要因にはどのようなものがあるかについて、多面的に理解を深めることを目的とする。さらに、ヘルスケアサービス提供過程は大変複雑であるので、健康・保健・医療・介護・福祉の各サービスはどのように関係し、連携すべきであるかについても講義する。医療・介護施設経営を例に、マネジメントの重要性についても講義する。

授業計画

第1回	ヘルスケアサービスの定義・範囲
第2回	ヘルスケアサービスの質
第3回	健康・保健・医療・介護・福祉分野におけるマネジメント
第4回	医療・介護経営 ① 組織、理念、価値
第5回	医療・介護経営 ② 開設主体、規模、部門、機能
第6回	医療・介護経営 ③ 人的資源、リーダーシップ、ワーク・ライフ・バランス
第7回	医療・介護経営 ④ 教育、研修、キャリアパス
第8回	医療・介護経営 ⑤ 物品管理、SPD、業務委託
第9回	医療・介護経営 ⑥ 情報システム、電子カルテ、シミュレータ
第10回	医療・介護経営 ⑦ 療養環境、栄養管理、ホスピタリティ、アメニティ
第11回	医療・介護経営 ⑧ 安全、感染管理、プロフェッショナリズム、パターナリズム
第12回	医療・介護経営 ⑨ スタンダードと評価、第三者、説明責任、質改善、情報開示
第13回	医療・介護経営 ⑩ チーム医療、地域包括ケア、連携
第14回	医療・介護経営 ⑪ インフォームド・コンセント、セカンド・オピニオン、意思決定、臨床倫理
第15回	まとめ：ベスト・プラクティスのために
第16回	期末試験

到達目標

- ① ヘルスケアサービスの特徴と質について説明できる。
- ② 医療・介護経営における重要な各要素について説明できる。
- ③ ベスト・プラクティスのために求められる視点について分析できる。
- ④ 健康・保健・医療・介護・福祉分野におけるマネジメントのあり方について考察できる。

履修上の注意

病院や診療所を利用することは特別なことではなく、医療サービスや介護サービスを利用することは誰もが経験することであるので、1人の人間として是非関心を持って受講していただき、質の向上について積極的に考えていただきたい。

予習・復習各90分程度。

評価方法

レポートおよび発表 40%、期末試験 60%。

テキスト

クレイトン・M.クリステンセン著

『医療イノベーションの本質』 中央経済社 2016年

授業概要

--

授業計画

第1回	
第2回	
第3回	
第4回	
第5回	
第6回	
第7回	
第8回	
第9回	
第10回	
第11回	
第12回	
第13回	
第14回	
第15回	
第16回	

到達目標

--

履修上の注意

--

予習・復習

--

評価方法

--

テキスト

--

授業概要

本講義では、国内、海外の地域経済を担っている地域企業と地域中小企業の事例研究を通じて、どのような独自戦略を展開して発展しているかを講義する。

また、受講生が自ら地域企業や地域中小企業を調査、分析することにより、課題を抽出し解決策まで提案することで、理解を深めることを目的としている。

授業計画

第1回	オリエンテーション
第2回	地域企業、地域中小企業とは何か
第3回	地域企業、地域中小企業の調査項目のとは何か
第4回	地域企業、地域中小企業のケーススタディーから各々2つ以上を選択
第5回	地域企業、地域中小企業のケーススタディーのプレゼンテーション
第6回	地域企業、地域中小企業のケーススタディーのプレゼンテーション
第7回	地域企業、地域中小企業のケーススタディーのプレゼンテーション
第8回	地域企業、地域中小企業のケーススタディーのプレゼンテーション
第9回	地域企業、地域中小企業のケーススタディーのプレゼンテーション
第10回	地域企業、地域中小企業のケーススタディーのプレゼンテーション
第11回	地域企業、地域中小企業のケーススタディーのプレゼンテーション
第12回	地域企業、地域中小企業のケーススタディーのプレゼンテーション
第13回	各自レポートの発表と討議
第14回	各自レポートの発表と討議
第15回	各自レポートの発表と討議
第16回	定期試験またはレポート

到達目標

地域企業、地域中小企業の実態を学ぶことで、国内外の経済社会の変化と将来を展望できる能力を身に付けることを目標とする。

履修上の注意

- ★事後学習として、授業で取り上げるケーススタディーに関する課題レポートを課す。
- ★企業を取り巻くグローバル経済・社会の最近の動向について、新聞記事・テレビでニュース・インターネット等を活用し企業の経営活動や経営戦略を定期的にフォローすること。
- ★関心のある企業の「経営」（多くの企業で「中期経営計画」として企業のホームページでの「企業情報」や「IR（投資家向け情報）」に公表されている）を読み（ホームページで閲覧可能）、専門用語等についての理解を深めておくことが望ましい。
- ★本講義では、学生と講師によるディスカッションを大切にしたいと考えている。地域企業、地域

予習・復習

予習、復習をきちんと行い、毎回出席すること。

評価方法

- 1) 期末試験もしくはレポートの成績（50%）
- 2) プレゼンテーション（40%）
- 3) 講義への貢献度、グループディスカッション、リアクションペーパー（10%）

テキスト

教科書名：『知られざる日本の地域力』

著者名：椎川忍ほか9名

出版社名：今井出版

出版年（ISBN）：2015（978-4906794676）

また、教員オリジナルの資料も使用する。実際の経営資料等も含まれるため事前配布は行わない。必要に応じて、授業後に配布可能なスライドを配布する。

授業概要

本講義は、日本企業の海外事業展開を 1970 年代初頭頃から 21 世紀の今日までを対象に講義します。これを通じて、日系世界企業による国際企業経営の特徴を解説します。主たる対象国は、アメリカと中国であり、日本企業のこれらの国への進出、両国での活動の実態を分析します。日本の製造企業の世界企業への転成、これを可能ならしめた要因、今日の日本の電気機械産業などに見られる国際的優位性の喪失、日系世界企業の活動の現段階、これらが議論の柱を構成します。

授業計画

第 1 回	はじめに
第 2 回	日本企業の海外進出の現状
第 3 回	日本企業の国際化の史的展開
第 4 回	日本企業のアメリカへの進出
第 5 回	日本企業と国際戦略提携
第 6 回	アメリカにおけるトヨタ自動車の国際合併事業
第 7 回	アメリカにおけるトヨタ自動車の市場支配
第 8 回	日本企業の中国への進出
第 9 回	中国における日本企業の現地生産・販売体制の形成—本田技研工業
第 10 回	世界貿易機関 (WTO) 加盟後の中国と日本企業
第 11 回	中国における日本企業の活動と課題 (1) —自動車市場
第 12 回	中国における日本企業の活動と課題 (2) —家電市場
第 13 回	中国における日本企業の活動と課題 (3) —産業財市場
第 14 回	中国における日本企業の活動の現段階
第 15 回	全体総括
第 16 回	課題レポートの提出と発表

到達目標

現代の日本の大企業による国際事業展開を学習し、日系世界企業の国際経営の実態について体系的に理解出来るようになることを目標とします。

履修上の注意

- (1) 各章・節の要点を記載したレジュメ、および資料 (統計、図表など) を出席者に配布します。講義はレジュメに沿って、その内容を解説しながら進めます。
- (2) 病気などの場合を除いて、毎回欠かさず出席してください。

評価方法

レポート (70%)、講義への積極的な参加 (30%)、で評価します。

テキスト

講義形式です。テキストを使う予定はありません。私が作成したレジュメ、資料を用いて解説します。参考文献は講義中に紹介します。なお、論文などを用いた演習方式を一部組み込みます。その際は、論文等は私が配布します。

授業概要

本講義は、マーケティング論の基本的な概念を確認すること、また、身近なマーケティング事例や興味・関心のあるマーケティングについて概念や理論を活用して説明することを目標としています。

授業計画

第1回	オリエンテーション
第2回	マーケティングの基礎①
第3回	マーケティングの基礎②
第4回	環境分析と市場機会の発見
第5回	セグメンテーションとターゲティングとポジショニング
第6回	ブランド戦略
第7回	顧客経験価値マーケティング
第8回	デジタルマーケティング
第9回	関係性マーケティング
第10回	マーケティングの各論① 受講者による発表
第11回	マーケティングの各論② 受講者による発表
第12回	マーケティングの各論③ 受講者による発表
第13回	マーケティングの各論④ 受講者による発表
第14回	マーケティングの各論⑤ 受講者による発表
第15回	まとめ
第16回	レポートの提出

到達目標

本演習は、以下の2点を到達目標とします。

- ・マーケティング論の基本的な概念を理解し、研究の前提知識として運用できる。
- ・興味関心のある分野（テーマ）におけるマーケティングについて理論を用いて発表することができる。

履修上の注意

この講義は、少人数で行われることが予想されます。活発な議論を行うために出席は必ずするようにしてください。無断での欠席や遅刻は厳禁とします。

予習・復習

特に指定はしません。

評価方法

発表…50点、レポート50点の計100点満点で評価する。

テキスト

- ・テキストは定めません。必要な資料は適宜配布します。

授業概要

この講義では戦後日本の歴史を企業経営の側面から概観し、日本企業が戦後復興を成し遂げ、高度成長を達成した軌跡を辿る。「日本的経営」技法の形成過程において最も大きな役割を果たしたのはアメリカの経営システムや近代的管理手法の移入であった。しかし、それは単なる模倣ではなく、当時の企業家たちがアメリカの経営技法を修正・改良しながら導入したところに大きな特徴があった。本講義ではアメリカの経営システム・管理手法の移入過程、および日本的経営技法を作り上げてきた経緯を確認すると同時に、「日本的経営」の特質を考えていきたい。

授業計画

第1回	オリエンテーション（授業方法、授業計画、評価方法、参考文献など）
第2回	日本における経営管理の近代化の試み
第3回	「日本的経営」と経営家族主義
第4回	戦後復興期における企業組織の再編
第5回	財閥から企業集団へ
第6回	アメリカの経営管理技法の移入と消化Ⅰ
第7回	アメリカの経営管理技法の移入と消化Ⅱ
第8回	移入技法の吸収と日本的改良Ⅰ
第9回	移入技法の吸収と日本的改良Ⅱ
第10回	日本的生産システムの形成Ⅰ
第11回	日本的生産システムの形成Ⅱ
第12回	「日本的経営」と集団主義
第13回	「日本的経営」と忠誠心
第14回	「日本的経営」の普遍性——「日本的経営」は異質か
第15回	日本的雇用慣行の現状と今後の在り方
第16回	定期試験

到達目標

- 1、アメリカから日本に導入された近代的経営手法の具体的な内容を習得したうえで、日本側の「創造的吸収」の意義、結果を理解することができる。
- 2、「日本的生産システム」、「日本的経営」に示された「日本的」特質とその普遍性について、概ね理解することができる。

履修上の注意

特に専門知識を前提としないが、戦後日本経営史に関する著書を通読し、予備知識として理解しておいてください。

評価方法

課題への取組み 80%、学期末試験 20%の配分割合で評価する。

テキスト

テキストならびに参考文献は授業中に適宜指示する。

授業概要

この授業では、1949年以降の中国の経済と企業経営について、いくつかのトピックをたてて講義する。授業内容を前後二つの部分に分けて進めていきたいが、前半では「人」にかかわる問題——「1人っ子政策」と「戸籍管理制度」を取り上げ、この二つの政策（制度）の実施過程、背景、内容および現状を概説する。そして後半では、中国の国有・国営企業の形成過程を概観したうえで、中国企業における組織と個人の関係を考察する。特に企業単位の人事管理制度、評価システム、組織成員の権威観、労働観、帰属意識などについて、アンケート調査の結果を交えて解説する。

授業計画

第1回	オリエンテーション（授業方法、履修上の注意、評価方法、参考文献など）
第2回	「1人っ子政策」実施の背景と内容①
第3回	「1人っ子政策」実施の背景と内容②
第4回	「1人っ子政策」の影響——食糧・資源・労働力・少子高齢化問題との関連から
第5回	戸籍管理制度実施の背景と内容①
第6回	戸籍管理制度実施の背景と内容②
第7回	戸籍管理制度の改革過程と現状①
第8回	戸籍管理制度の改革過程と現状②
第9回	国有・国営企業の形成過程と特徴①
第10回	国有・国営企業の形成過程と特徴②
第11回	「単位」の概念、成立要因、機能
第12回	企業単位における組織と個人の関係①
第13回	企業単位における組織と個人の関係②
第14回	中国企業の組織成員の権威観
第15回	中国企業の組織成員の労働観と帰属意識
第16回	定期試験

到達目標

- 1、中国の人口政策、戸籍管理制度の内容、仕組み、特質を理解することができる。
- 2、改革・開放前の国有・国営企業の特徴、問題点および改革開放後の国有企業の変貌を認識することができる。
- 3、中国企業における組織と個人の関係の歴史的流れを把握し、組織・個人関係の特質を理解することができる。

履修上の注意

受講生が中国の経済・経営についてある程度の知識を習得していることを前提に講義を進めていく。基礎知識のない受講生は現代の中国経済・経営に関する文献・著書を通読し、予備知識として理解しておいてください。

評価方法

課題への取組 80%、学期末試験 20%の配分割合で評価する。

テキスト

テキストならびに参考文献は授業中に適宜指示する。

授業概要

株式会社を巡る様々な事象について、会社法の規定と実務的視点の双方からのアプローチによって講義・解説します。特に今日的な課題であるコーポレート・ガバナンス、内部統制システム、M&Aについては、具体的な事例をベースに検討します。また、会計不祥事に関連して、会計監査人と取締役・監査役との連携の在り方などの最近話題となっているテーマについても、極力、紹介します。なお、大学院生を対象としていますので、受講生の修士論文作成に関係すると思われるテーマについては、極力、重点的に取り上げるようにいたします。初回の授業の際に、各受講生に確認いたします。対面による講義方式を基本としますが、双方向的なスタイルも適宜取り入れます。

授業計画

第1回	授業の進め方、評価の仕方、会社法という法律の位置づけ
第2回	会社の種類と会社の利害関係者
第3回	会社機関設計と企業自治～株主総会や取締役等の機能～
第4回	外国会社の機関設計と特色～日本型経営との比較～
第5回	会社の資金調達の手段と長短～会社資金が不足したときの対応～
第6回	会社役員の実任追及の手段と対応～株主代表訴訟制度について考える～
第7回	企業買収（M&A）の仕組み
第8回	敵対的買収を巡る企業間の攻防～企業経営者はどのようにして対応するか～
第9回	企業買収の是非～経営者や従業員からの視点の考察～
第10回	事業譲渡と会社合併・会社分割の内容と仕組み
第11回	会社設立と設立準備実務～起業するときの手続き～
第12回	会社の倒産、会社更生、民事再生
第13回	企業不祥事と内部統制システムの整備の具体的内容
第14回	企業価値向上と企業の社会的責任～意義と企業の具体的実践～
第15回	会社を巡る最新トピックス（ESG 経営等）

到達目標

- ① 株式会社を巡る法制度を理解するとともに、企業買収や資金調達等の具体的な事象に対して、会社法の具体的な適用について、裁判例も踏まえながら理解を深めることができること
- ② 大学院生として相応しい理論的な思考を身につけることができること（リーガルマインド）

履修上の注意

特に会社法の事前知識は不要です。重要な法律用語などは都度解説をするとともに、授業を通じて、会社法と 実務への応用の理解が深まれば良いと考えています。

予習・復習

- ① 予習：次回の授業の範囲を提示しますので、教科書で該当箇所を通読しておいてください。また、該当するテーマについて、インターネットや新聞情報を確認することも有益です。
- ② 復習：レジュメに記載された課題・問題について、講義内容を振り返りながら、解答を整理することにより、知識や考え方の定着を図ります。

評価方法

期末レポート 80%、授業参加の姿勢 20%（質疑等）。なお、出席が著しく不良の場合は、評価対象外とします。

テキスト

高橋均『実務の視点から考える会社法(第2版)』中央経済社(2020年)ISBN978-4-502-35491-5
 その他、毎回、オリジナルのレジュメを配ります。参考文献は、授業中に適宜紹介します

授業概要

この授業では、グローバル化時代の財務会計の基礎理論とその応用について学ぶ。まず、会計基準の設定背景、その基礎をなす会計諸概念の体系に関する知識の習得を目的とする。また、金融商品・退職給付・減損処理・資産除去債務など、会計基準の国際的統合化の中で新たに制度化された会計処理への適用を取り上げ、最新の知識と技法の習得を目指す。また、職業会計人志望者のために、簿記検定試験や税理士・公認会計士試験の出題傾向等について適宜情報提供しながら講義する。

授業計画

第1回	企業会計制度と会計基準
第2回	会計公準と概念フレームワーク
第3回	財務会計の役割—利害調整機能と情報定提供機能の特徴分析
第4回	会計情報の意思決定有用性の意義と問題
第5回	財務諸表の構成要素（純利益と包括利益の意義など）
第6回	財務会計における認識と測定
第7回	割引キャッシュ・フロー計算の仕組みと応用
第8回	収益認識の仕組みと応用
第9回	公正価値会計
第10回	連結及び企業結合の会計
第11回	金融商品会計
第12回	リース会計
第13回	減損及び資産除去債務の会計
第14回	退職給付会計
第15回	ヘッジ及びストックオプションの会計
第16回	定期試験

到達目標

- ・修士論文作成に必要な会計理論が習得できる
- ・国際会計問題についての分析力の向上が可能
- ・グローバル化に伴う国際会計制度が理解できる

履修上の注意

- ・授業の進め方は講義形式と受講生による発表を中心とする。
- ・授業での積極的な貢献が求められる。
- ・講義のほか、受講生による研究報告と議論も行う。

予習・復習

- ・自己の論文テーマに関する予習復習に務めること。
- ・指示された内容に関する資料収集を心掛け、事前に読み込んでおくことが望ましい。

評価方法

期末試験またはレポート報告 60%、授業での積極性（報告の内容及び質疑応答など）40%

テキスト

- ・開講時に指示する。
- ・必要に応じて関連資料を配布する。

授業概要

管理会計は、経営者の意思決定に有用な会計情報を提供するための会計である。言い換えれば、経営者が経営上の諸問題を発見・解決するため、そして組織をうまく運営するために重要な会計である。本講義は管理会計の基礎的な知識と技術の習得を目的として講義する。

本講義ではただ単に管理会計の技法を扱うだけでなく、管理会計が歴史的にどのように発展してきたのか、組織や経営の変化とどう関係にあるのかという観点も含めて、説明する。なお、受講生人数や受講生の会計知識の習得状況など反応をみて内容や講義方法を多少変更することがある。

授業計画

第1回	ガイダンス
第2回	管理会計の概要・意義について
第3回	管理会計の歴史
第4回	意思決定の定義とプロセスについて
第5回	財務諸表分析① 収益性の分析
第6回	財務諸表分析② 安全性の分析
第7回	財務諸表分析③ 生産性・成長性の分析
第8回	利益管理① 短期利益計画
第9回	利益管理② 損益分岐点分析
第10回	組織と管理会計、事業部制の評価
第11回	設備投資の意思決定① 設備投資の分類と評価
第12回	設備投資の意思決定② 設備投資の経済性計算
第13回	意思決定のための原価計算
第14回	差額収益分析
第15回	まとめと復習
第16回	試験

到達目標

- 管理会計の全体像を理解することができる。
- 具体的な管理会計手法を理論的および実践的に理解することができる
- 企業経営における様々な意思決定とそのメカニズムを理解することができる。

履修上の注意

財務会計の基礎知識（B/S、P/Lが読める）がある前提で講義を進めます。

予習復習

予習復習は各自必ず行うこと。

評価方法

期末試験 or レポート（60%）、受講態度 40%で評価します。

テキスト

藤井則彦・藤井博義・威知謙豪（2020年）『スタートアップ財務管理と会計—コーポレート・ガバナンス、日本企業の経営組織との関連で』 中央経済社

授業概要

この授業の目的は修士課程での国際会計特論の講義の水準を発展・進化させることを踏まえて、論文作成に必要な国際会計論の理論を学ぶことである。IFRS 適用には資産と負債における公正価値の評価範囲の拡大と包括利益の表示による利益概念の変化に対処することが要求される。特に、IFRS 適用企業を中心に財務諸表の事例分析を通して、IFRS と日本基準との理論的関連性を分析するとともに、IFRS 適用のあり方や日本の企業会計の国際的に対応するための手法を講義する。

授業計画

第1回	国際会計基準（IFRS）の意義とその特徴
第2回	会計国際化の変遷と IFRS 適用の状況
第3回	日本基準の固有性と IFRS との関連性分析(1)
第4回	日本基準の固有性と IFRS との関連性分析(2)
第5回	公正価値会計の特徴と論点整理
第6回	公正価値会計の適用上の個別論点
第7回	公正価値評価とその影響分析の争点
第8回	会計観の相違と利益概念の変化との関連性
第9回	包括利益の概念と論点整理
第10回	包括利益の導入と業績報告
第11回	IFRS 適用企業の実態分析とその検討(1)
第12回	IFRS 適用企業の実態分析とその検討(2)
第13回	IFRS 適用企業の実態分析とその検討(3)
第14回	IFRS 適用企業の実態分析とその検討(4)
第15回	日本における IFRS 適用の課題とその可能性の検討
第16回	定期試験

到達目標

- 博士論文の作成に必要な会計理論と制度分析に関する知識の習得
- グローバル化に伴う国際会計問題についての分析力の向上
- 会計制度の国際的動向や会計情報の分析能力の習得

履修上の注意

- 授業の進め方は講義形式と受講生による発表を中心とする。
- 自己の論文テーマに関する予習復習に務めること。
- 授業での積極的な貢献が求められる。

予習・復習

授業の理解度を高めるために、レポートなどを通して講義内容に合わせて国際会計の関連用語を熟知させる。

評価方法

期末試験またはレポート報告 60%、授業での積極性（報告の内容及び質疑応答など）40%

テキスト

- 開講時に指示する。
- 必要に応じて関連資料を配布する。

授業概要

本講義は、公認会計士や監査法人が実施する会計監査がどのようなものであるのかを知ることを目的としている。会計監査といえば、監査人が最後に提出する短い文言の監査報告書だけが成果物であるので、そこに係れている結論だけでは、どのような監査が行われたのか、一般の人には理解が出来ない。その理解のために、『監査基準』および監査基準委員会報告等の公表物に基づいて、実際に現場に立っている公認会計士の立場から、我が国における会計監査制度の全体像を簡潔に講義する。

授業計画

第1回	会計監査総論
第2回	会計監査の歴史と監査基準について
第3回	会計監査の理論と監査人について
第4回	監査実施の全体像
第5回	監査意見と監査手続（1）
第6回	監査意見と監査手続（2）
第7回	内部統制と試査
第8回	リスク・アプローチに基づく監査（1）～リスク・アプローチの基本的な考え方
第9回	リスク・アプローチに基づく監査（2）～リスク評価とリスク対応
第10回	リスク・アプローチに基づく監査（3）～監査上の重要性等
第11回	監査計画と監査調書（1）
第12回	監査計画と監査調書（2）
第13回	他の監査人等の利用、経営者確認書
第14回	監査人の意見と監査報告書
第15回	除外事項と監査報告
第16回	筆記試験

到達目標

- ・会計監査が実際にはどのような手続きで行われているのかを理解すること
- ・会計監査がどのような社会的意義を有しているのかを理解すること。
- ・会計監査の社会的な役割について理解すること。
- ・公認会計士試験の試験科目である監査論の基本的な知識を習得すること。

履修上の注意

遅刻等について：講義中の入室は、講義の流れを悪くするので、極力避けること。

予習復習

- ・予習については、テキストの該当ページを読む程度。
- ・復習については、講義時に配布したプリントを通読。

評価方法

試験結果 80%、平常点（授業態度等）20%で評価する。

テキスト

- ・講義の都度、資料等を配布予定であるので、必要なし。

授業概要

本講義は、商業簿記における記帳方法を学び、財務諸表の構成要素についての理解を深めることを目的とします。簿記は企業の経済活動を記録し、財務諸表を作成する技術です。そして、財務諸表で報告しようとする内容は会計基準等の制度の影響を受けます。この意味で、各单元では制度的なトピックも反映することになります。

授業計画

第1回	簿記の習熟度の確認、現金と金銭債権
第2回	金銭債権（手形取引）
第3回	金銭債権（償却原価法）
第4回	金銭債権（貸倒れ）
第5回	有価証券
第6回	商品売買（記帳方法と売上原価）
第7回	収益認識の考え方
第8回	収益認識の事例
第9回	有形固定資産（減価償却と減損）
第10回	有形固定資産（リース）
第11回	社債
第12回	株主資本
第13回	決算整理の復習
第14回	決算整理の演習
第15回	まとめ ・ 簿記の歴史と会計制度
第16回	定期試験（レポート課題に代える場合もある）

なお、受講者の学習経験等を考慮し、受講者と相談の上、適宜、範囲や内容を変更します。

到達目標

財務諸表の構成要素について、基本的な簿記処理が理解できる。

履修上の注意

概ね、上記の講義計画の内容について、基礎的内容から確認し、講義を進める予定です。ただし、各单元について、網羅的に扱うというよりは、限定的に取り扱うことになります。

習熟度によっては相談の上、収益認識会計基準の設例に特化した内容になることがあります。

予習・復習

これまでに学んだことのある範囲の事前復習と授業後の問題演習。

評価方法

講義に演習を含むため、授業における参加姿勢などを加味して総合的に評価します。

テキスト

1冊使用する予定です。具体的には開講時に指示します。

授業概要

本講義では、組織の資金調達の手法と実務を学ぶ。特に資金調達における考え方、リスク等の留意点に注力して講義する。モデルとして日本の「病院」を選択し、病院における資金調達を通じてファイナンスを理解する。

しかし日本の民間病院では株式発行による資金調達は実質的に禁止されている（「医療法人は、剰余金の配当をしてはならない」－医療法第54条－）。「株式は人類最大の発明の一つ」ともいわれており、主要な資金調達手段である。そこで（病院の資金調達では欠落しているが）株式発行による資金調達を2コマ講義する。

授業計画

第1回	資金調達における6つの検討項目（調達可能金額、調達条件、オールインコスト、難易度と必要時間、経営権への影響、調達の継続性/安定性）
第2回	資金調達・資金運用の区分（短期/長期、間接金融/直接金融、自己資本/他人資本）
第3回	貸借対照表とファイナンス（デット、エクイティ、アセット、ヒドン）
第4回	短期資金調達（資金繰り管理、運転資金、借入金利/利息の計算方法）
第5回	長期資金調達（長期資金調達形態、設備投資資金への与信審査、担保、保証人）
第6回	デット・ファイナンス①（政府系金融機関からの資金調達）
第7回	デット・ファイナンス②（民間銀行借入。信用格付、債務者格付）
第8回	デット・ファイナンス③（シンジケートローン）
第9回	デット・ファイナンス④（債券発行による資金調達）
第10回	エクイティ・ファイナンス（自己資本：資本金、資本準備金、利益剰余金）
第11回	アセット・ファイナンス①（診療報酬債権流動化、不動産流動化）
第12回	アセット・ファイナンス②（ファクタリング、資産担保証券 ABS）
第13回	ヒドン・ファイナンス（簿外債権・債務：ファイナンスリース）
第14回	株式発行による資金調達①（株式の歴史）
第15回	株式発行による資金調達②（株式発行、配当）
第16回	課題レポートの提出と発表

到達目標

- ① 現在の日本における「資金調達」の手法、実務について理解する。
- ② 各種の資金調達における調達条件、リスク等を客観的に正確に理解する。

履修上の注意

本講義は講義形式で行う。復習をしっかりと行うこと。
財務諸表（貸借対照表、損益計算書、キャッシュフロー計算書）の仕組みを理解していることを受講条件とする。

予習・復習

講義では履修者が初めて聞くことが多いと推される（資金調達の方法や実務を解説した書物は大変少ない）。受講の後、復習を行い不明点、照会事項があれば積極的に質問してほしい。

評価方法

レポート 70%、授業への積極的な参加 30%で評価する。

テキスト

（教科書）福永肇著『病院ファイナンス』、日本医療企画、2020年、2,800円＋税
ISBN 978-4-86439-921-0

授業概要

本講義が対象とする領域は、租税法の解釈の分野であり、立法政策論の分野には、深入りしない。

本講義が養成する能力は、租税法解釈に関する種々の専門的能力である。そのために、租税法の解釈論を、次に、法的思考を講義する。具体的には、法的三段論法や事実・基準・効果の解説や訓練に力を入れる。なぜなら、これらの思考方法は、租税法の専門家になるためにはもちろん、社会生活や仕事においても必要だからである。以上の講義を通じて、論理的思考、分析的思考等の方法論を学修し、論文作成能力の養成に有用な講義とする。

授業計画

第1回	租税法序説
第2回	租税法の基本原則その1
第3回	租税法の基本原則その2
第4回	租税法の解釈総論その1
第5回	租税法の解釈総論その2
第6回	租税法の解釈各論その1
第7回	租税法の解釈各論その2
第8回	租税法の適用その1
第9回	租税法の適用その2
第10回	租税法の適用その3
第11回	租税実体法：課税要件総論
第12回	所得税法
第13回	法人税法
第14回	その他の税法
第15回	まとめ
第16回	期末レポート

到達目標

- 1 租税法の解釈における本質を把握する力、分析することができる力、論理的に思考することができる力を身に付けること。
- 2 そのことによって、租税法の専門家として税法解釈上の正しい判断ができること。

履修上の注意

租税法関係科目の知識（租税法の知識、卒業論文を書いた経験）は必須である。本講義は、租税法の修士論文作成を前提とした科目である。したがって、深く、確実に、理解し、論文に活用できる力をつける必要がある。上記授業計画には、法制度のテキストの目次を示した。しかし、論文作成には、もっと重要な知識と技術が必要となる。すなわち、法解釈の方法論、法的三段論法、実際適用事例等の知識・技術である。その指導方法は、佐藤メソッドという独自の方法に拠る。また、履修生は社会人院生が多いこと等から、この科目も含め、修士論文関係科目を、基本的に、オンラインで講義・指導する。

予習・復習

膨大で、詳細なテキストを配布するので、主として、このテキストの予習復習は必須である。予習復習にかかる時間は、文科省の基準（学部に関して原則として90分授業1回あたり、自宅等で最低4時間）に沿って、理解・訓練・実行を内容とする予習・復習が必要であるが、大学院は、研究するのであるから、学部よりも、もっと多い時間を学修に充てる必要がある。こうした地道で着実な努力によって、「学ぶ楽しさ、知るよろこび」を実感できるはずである。

評価方法

「レポート」（70%）、「授業での発表態度（理解力の程度・質問への応答内容・意見陳述等の巧拙等）」（30%）で評価する。修士論文作成者を前提とするので、文章の書き方も評価対象となる。

テキスト

この講義専用に、教員が作成したテキストを、第1回目の授業開始時に配布する。なお、参考書は、金子宏著「租税法（第24版）」（弘文堂、2021年）（最新版）とする。これより古いものでも、版によっては可能である。

授業概要

法人税法は実学（実務学）である。したがって、毎回の講義は、基本的には、まずは、ある項目（例えば、「収益の計上時期」以下同様。）の具体的事例を題材にして、その制度、仕組みを法人税法や通達を基に理解してもらい、次に、その項目に係る取引が会計処理を経て実務上、法人税の申告書でどのように表現されるかを体得してもらう。そして、最後に裁判例、裁決事例を題材にして、その項目に係る法令解釈、課税要件等を明らかにし、解釈上、実務上の論点等についても、使用した裁判例等の既判力、射程距離を踏まえ講義する。

修士論文作成者には、そのヒントや問題点を、税理士、あるいは企業の税務担当として活躍したい者には、各項目の体系的な整理ができるよう、加えてこれまでの国税勤務経験をもとに課税庁側の視点も踏まえたところで、各項目の実務的な理解がより深まるよう講義する。

授業計画

第1回	法人税法の概要・仕組み
第2回	収益の計上時期
第3回	原価・費用の計上時期
第4回	給与（賞与）
第5回	公租公課
第6回	減価償却・繰延資産償却・特別償却
第7回	圧縮記帳（収用・固定資産の交換・特定資産の買換え）
第8回	費途不明金・使途秘匿金・繰越欠損金
第9回	寄附金
第10回	交際費
第11回	引当金（貸倒引当金他）・貸倒損失
第12回	企業再編税制
第13回	企業再編税制
第14回	グループ法人税制、グループ通算税制
第15回	グループ通算税制、法人税法総まとめ
第16回	期末レポート

到達目標

法人税法の全体的構成及び個別の項目の理解を深めるとともにそれらに関する主要な判例の研究も進められるように法人税法の条文自体を読みこなせる（課税要件を理解する）こと、併せて独力で簡単な法人税確定申告書を作成できるようにすることが目標である。

履修上の注意

- 簿記2級程度の知識があった方が望ましい（無くても、その都度仕訳を説明するなどして、分かりやすい講義の進め方に努めたい。）。
- 前後の項目の関連性に配慮した授業計画となっており、したがって、予習復習が重要となっている。
- 電卓携行のこと。

予習・復習

- 第4回（給与等）までと第7回（圧縮記帳等）～は、各々前回授業、第5回（公租公課）は第1回（法人税法の概要・仕組み）授業の復習が必要である。
- 第12回（企業再編税制）～は、その概要について予習が必要である。

評価方法

○ 学期末レポート 70%、授業内レポート（小試験含む） 20%、受講態度 10%。

テキスト

- 税法六法（法人税関係、出版社を問わない。）
- 租税判例百選（有斐閣）・第7版
- 適宜レジュメを配布する。

授業概要

所得税法は、租税法の中でも基本的な税法といえる。

本講義では、所得税法の各規定を広く確認することを通じて所得税法の仕組みを理解する。また、各規定のうち解釈及び適用について争いのあったものについて、趣旨や考え方、学説、判例にも触れて理解を深いものとする。

内容としては、授業計画のとおり広範囲のものとなるが、一つひとつの項目の学習を通じて、所得金額や税額計算に当たって生じた疑問点について法令や判例を根拠に自ら検討できるように学んでいく。

授業計画

第1回	所得税総説
第2回	所得の概念、非課税所得、納税義務
第3回	各種所得の意義と範囲(1) 利子、配当、不動産、事業所得
第4回	各種所得の意義と範囲(2) 事業、給与、退職所得
第5回	各種所得の意義と範囲(3) 譲渡、山林、一時、雑所得
第6回	収入金額と必要経費(1) 各種所得の計上時期
第7回	収入金額と必要経費(2) 家事関連費、販売費・一般管理費、減価償却
第8回	収入金額と必要経費(3) 資本的支出と修繕費、資産損失
第9回	収入金額と必要経費(4) 各種の特例
第10回	損益通算及び損失の繰越控除
第11回	所得控除と税額控除
第12回	税額計算と申告納税
第13回	非居住者の納税義務
第14回	源泉徴収制度
第15回	総まとめ
第16回	テスト

到達目標

- 1 各条文の理解を積み上げて、所得金額の計算から申告までを理解し、所得金額や税額の計算に当たって生じた疑問点について、法令や判例を根拠に検討できるようにする。
- 2 一般的な決算書や確定申告書の作成ができるようにする。

履修上の注意

- 1 第1回から第9回までは、テキスト（金子宏「租税法」）の講義該当箇所を一読した上で講義に臨んでいただきたい。
第10回以降は、その都度予習すべき内容を示す。
- 2 電卓を携行すること。

予習・復習

講義で取り上げる条文に予め目を通し、復習に際しては、繰り返し条文を読み、条文の理解に努めていただきたい。

評価方法

テスト 70%、受講態度 30%により評価する。

テキスト

- 税法六法（法令編及び通達編）（出版社は問わない。）
- 租税法（弘文堂・法律学講座叢書・金子宏著）最新版
- 適宜レジュメを配布する。

授業概要

相続税は民法上の「相続又は遺贈」により財産を取得した者に課される租税であり、一方、贈与税は同様に「贈与」によって財産を取得した者に課される租税である。したがって、相続税法の基本的仕組みを理解するためには、民法をはじめとする関連する私法の知識が不可欠である。

本講義では、民法を基本として相続税法の各条文の解釈に重点を置き、関連する参考判例を紹介しつつ研究の範囲を拡げ、相続税法の仕組みと内容の理解を深めることを目的とするほか、課税実務上、課税標準たる財産の時価は、財産評価基本通達の定めにより評価した価額によっていることから、同通達に定める基本的な評価方法を理解する。

授業計画

第1回	相続税法の概要・相続税の課税要件Ⅰ 課税原因
第2回	相続税の課税要件Ⅱ 納税義務者・課税財産①
第3階	相続税の課税要件Ⅲ 課税財産②
第4回	相続税の課税価格Ⅰ 課税価格の計算等
第5回	相続税の課税価格Ⅱ 小規模宅地等の特例
第6回	相続税の税額計算
第7回	贈与税の課税要件Ⅰ 課税原因・納税義務者・課税財産①
第8回	贈与税の課税要件Ⅱ 課税財産②
第9回	贈与税の課税価格と税額計算等
第10回	財産評価Ⅰ 時価と財産評価基本通達の位置付け等
第11回	財産評価Ⅱ 土地等及び非上場株式等の評価
第12回	財産評価Ⅲ 財産評価基本通達の定めによらない評価
第13回	同族会社の行為計算否認
第14回	申告と納付
第15回	納税申告と民法総則の適用関係

到達目標

1. 相続税法の概要を把握し、相続税及び贈与税に係る事例、裁判例を通じて各条文の理解を深めるとともに、課税実務にも対応できるようにする。
2. 課税財産である土地等及び株式等の基本的な評価方法を理解する。

履修上の注意

1. 相続法（民法第5編相続）に関する一般的な知識は必須。
2. 理解に資するため適宜、事例等を出題し各自の見解を求める。

予習・復習

○ 講義で配布する参考資料については、講義中に必要な箇所しか説明することができないので、説明しなかった点については必ず一読しておくこと。

評価方法

○ 課題レポート 60%、受講態度及び研究姿勢 40%

テキスト

- 税法六法（出版社は問わない。）
- 租税法（弘文堂・法律学講座叢書・金子宏著）・最新版
- 租税判例百選（有斐閣）・最新版

授業概要

消費税は、社会保障の安定財源として、その役割は益々重要な税目となっている。2023年10月には、複数税率（10%と8%）に対応するために仕入税額控除の要件が抜本的に改正され、インボイス制度が導入された。

また、高額な固定資産の取得や輸出物品販売場を舞台とした不正還付が散見されていることから、その対応策として数次の税制改正が行われており、導入時に比べ制度が複雑となっている。

本講義では、消費税の基本的な仕組みに加え、制度改正の背景や実務上の取扱いについて、重要な裁判例や裁決事例も取り上げながら講義する。

授業計画

第1回	消費税導入の経緯と我が国の税制における消費税の位置付け
第2回	課税の対象 ①課税対象となる取引の範囲と「資産の譲渡等」の意義
第3回	課税の対象 ②内外判定と国境を越えて行う電子商取引の課税関係
第4回	非課税取引
第5回	輸出免税取引 輸出免税の概要と今後の課題
第6回	納税義務者と高額特定資産等を取得した場合の納税義務免除の制限
第7回	資産の譲渡等の時期（納税義務の成立時期）と課税期間
第8回	課税標準及び税率（軽減税率制度を含む。）
第9回	仕入税額控除 ①仕入税額控除制度の趣旨と課税仕入れの意義・範囲
第10回	仕入税額控除 ②インボイス制度
第11回	仕入税額控除 ③インボイス制度、仕入控除税額の調整
第12回	簡易課税制度
第13回	国・地方公共団体等に係る仕入控除税額の特例計算
第14回	申告・納付・届出等、総額表示義務、消費税額及び地方消費税額の計算
第15回	まとめ（誤りやすい実務事例の検討等）
第16回	課題レポート

到達目標

消費税について、実務上の取扱いにとどまらず、制度の趣旨・背景を理解するとともに、消費税のあるべき方向から将来的な課題を考えることができる。また、基本的な知識を身に付け、それに基づき実際の事例を解決することができる。

履修上の注意

- 1 講義終了後に、その都度講義内容は資料を見返して、理解を深めてほしい。
- 2 理解の程度を把握するために適宜、事例等について各自の意見を求めることがある。
- 3 必要に応じ、電卓を携行する（随時指示する。）。

予習・復習

テキスト（租税法）の講義該当部分について、予習してくること。

評価方法

期末試験に代えて、課題レポート（70点満点）を課す。課題レポートでは、消費税の基本的な仕組みや講義した内容を理解しているかどうかを判定する。

このほか、履修態度等を加味した平常点（30点）と合わせて100点満点とする。

テキスト

- 租税法（弘文堂・法律学講座双書・金子宏著）最新版
- 租税判例百選（有斐閣）第7版
- 税法六法
- 適宜レジュメ等を配付する。

授業概要

本講義の範囲は、国際租税法の基礎理論及び国際租税法体系全般である。これを根拠法令は何かという見地からみると、「租税条約」及び「国際間の二重課税の調整を規定する国内法（法人税法及び所得税法）」の2つである。本講義の項目は、主として、国際租税法の基本理念、基本構造（課税国、居住性、源泉性）、非居住者・外国法人課税制度、租税条約等である。近年、多くの企業が国際取引を行う時代となってきたこと、国際取引に対する課税ルールが国により、また、租税条約により異なること、国際租税法の世界の課税ルールは国内取引の課税ルールに比して複雑・多様であり、執行が難しいこと、等がこの分野の特徴である。これを効率的効果的に理解するため、事例を用意しつつ、解説する。

授業計画

第1回	第1章	国際課税の基本概念及び構造
第2回	第2章	国際課税の基礎概念（その1：居住性）
第3回	第3章	国際課税の基礎概念（その1：源泉性）
第4回	第3章	国際課税の基礎概念（その2：源泉性）
第5回	第3章	国際課税の基礎概念（その3：源泉性）
第6回	第4章	非居住者・外国法人課税の基本構造(その1)
第7回	第4章	非居住者・外国法人課税の基本構造(その2)
第8回	第4章	非居住者・外国法人課税の基本構造(その3)
第9回	第5章	租税条約(その1)
第10回	第5章	租税条約（その2）
第11回	第5章	租税条約(その3)
第12回	第5章	租税条約（その4）
第13回	第5章	租税条約(その5)
第14回		まとめその1
第15回		まとめその2
第16回		期末レポート

到達目標

- 1 国際租税法のうち特に、基本的概念及びその構造を理解することができること。
- 2 それらの概念・構造を正確に理解することによって、実際に生じている国際課税に係る諸問題の解決力を身に付けること。

履修上の注意

国際租税法はとても複雑である。国内税法が複雑であるうえに、租税条約が重疊的にかぶさってくるので、この複雑な世界を読み解く、意欲、読解力、勉強時間、根気のある履修生のみ履修が可能である。なお、履修生は社会人院生であることが通常であるので、この科目も含め、修士論文関係科目を、基本的に、オンラインで講義・指導する。

予習・復習

下記のテキストの予習復習は必須である。予習復習にかかる時間は、文科省の基準（学部に関して原則として90分授業1回あたり、自宅等で最低4時間）に沿って、理解・訓練・実行を内容とする予習・復習が必要である。したがって、大学院は、学部よりも、もっと多い時間を学修に充てる必要がある。こうした地道で着実な努力によって、「学ぶ楽しさ、知るよろこび」を実感できるはずである。

評価方法

「レポート」（70%）、「授業での発表態度（理解力の程度・質問への応答内容・意見陳述等の巧拙等）」（30%）で評価する。

テキスト

佐藤正勝著『佐藤正勝基本テキストシリーズ国際租税法 基礎体系編』（2016年、アイ・アソーシエイツ出版）

(注)このテキストは、教員が(講義初回に)用意するので、事前入手はしないこと。

授業概要

環境会計（Environmental Accounting）とは、企業や組織が環境に対する経済的な影響や資源利用を定量的に評価し、経営判断や持続可能性の向上に活用するための会計手法である。企業が環境への貢献や負荷を会計上で計測し、環境に対する経済的な要素を財務報告に組み込み、効果的な環境経営を実現するためのツールとして広く活用している。授業では、環境会計の理論を考察し、代表的な論文を取り上げながら、その実態や諸課題について理解を深められるよう講義する。

授業計画

第1回	講義の狙い、全体像、進め方、評価方法および受講上の注意点
第2回	Grayらのグリーンアカウンティング
第3回	D.B.ルーベンスタインの学説と環境会計
第4回	環境会計と付加価値計算書
第5回	環境会計とサステナビリティ
第6回	環境会計と環境コスト
第7回	環境会計の視点：証券市場か市民社会か
第8回	経営分析における環境会計
第9回	環境会計ガイドラインと環境庁（現環境省）の取り組み
第10回	環境会計における効果の考え方
第11回	環境会計と環境パフォーマンス評価
第12回	環境会計ガイドラインの改訂と課題
第13回	「環境」会計と環境「会計」の違いと融合
第14回	環境会計と環境報告の統合
第15回	諸外国における環境会計の導入と展開
第16回	—

到達目標

- ・環境会計の専門知識を理解し、関連分野の現状、特徴や諸課題について説明できる。
- ・環境会計の専門知識を応用し、自らの視野と可能性を広げることができる。

履修上の注意

- ・授業計画（テーマや順番など）は変更になることがある。
- ・授業開始から30分までは遅刻として受講を認める。（遅延証明や体調不良等の証明がある場合を除く）
 - ・遅刻3回で1回の欠席扱いとし、無断欠席が累計6回以上の場合、単位付与は行わない。

予習復習

- ・予習：授業計画に沿って、関連論文等を活用して適宜に予習しましょう。
- ・復習：授業終了後、関連論文等を再読するなど理解を深めましょう。

評価方法

- ・平常点 100%

テキスト

指定教科書はありません。毎回、参考資料等を配布します

授業概要

この授業では、主にコーポレート・ファイナンスに関連した諸問題を講義します。コーポレート・ファイナンスの基礎理論であるモジリアーニ・ミラー理論では、資金調達の違いが企業価値に影響を及ぼすことはなく、また投資の決定と資金調達の問題はそれぞれ独立に決定されます。しかしながら、現実の世界では、企業の投資の決定と投資に必要な資金の調達に関する問題とは密接に関連しています。この授業では、このようなMM理論と現実との違いに注意を払いながら、コーポレート・ファイナンスの問題を多面的に考察します。また、各種のコーポレート・ガバナンスのテーマや金融危機および金融規制、そしてESGの問題などにもアプローチします。

授業計画

第1回	オリエンテーション：この授業で学ぶこと
第2回	モジリアーニ・ミラー理論
第3回	最適資本構成の理論
第4回	コーポレート・ガバナンス論の系譜
第5回	コーポレート・ガバナンス論の発展
第6回	CSRとESG
第7回	メインバンクの機能
第8回	系列の機能に関する実証分析
第9回	東アジアのファミリービジネス
第10回	法とファイナンス
第11回	バブル崩壊後の日本の金融危機
第12回	銀行のコーポレート・ガバナンス
第13回	金融システムとコーポレート・ガバナンスの展望
第14回	アメリカ発の世界金融危機
第15回	グローバルな金融規制
第16回	期末レポートの提出

到達目標

- 企業金融、コーポレート・ガバナンス、金融危機、金融規制などの分野で、理論や実証分析に関する代表的な先行研究を理解できる。
- 同分野で、オリジナルな分析ができる。

履修上の注意

受講生は、企業金融論、金融システム論、銀行論、計量経済学などの科目の学部レベルの知識を備えていることが必要です。また、この授業では講義と受講生による英語論文の内容報告のハイブリッド形式で進める予定です。

予習・復習

各回の講義で予定されているテーマの概要を事前に理解するとともに、各回の授業終了後に内容を復習することを求めます。

評価方法

期末レポート 50%、報告内容 30%、授業への取り組み姿勢 20%。

テキスト

授業で取り上げる資料や文献等を、その都度紹介、配布します。

授業概要

国際金融システムの変遷を踏まえた、金融グローバル化の意義と本質について講義する。すなわち、ブレトン・ウッズ体制からニクソン・ショック、スタグフレーションと2度のオイルショック、プラザ合意と通貨金融危機の頻発、そのなかでのグローバル化の進行という歴史的な意味の考察を踏まえて、金融、証券、企業におけるグローバル化と国際金融システムについて講義する。さらに最近のドルおよびユーロ危機を踏まえて、新たな国際通貨制度についての講義も行う。毎週の授業の中で、国際金融に関する時事問題について解説を行い、理論と実務の両面から統合的に理解を深める。

授業計画

第1回	国際通貨と決済システム
第2回	国際収支と国際貸借
第3回	国際通貨
第4回	国際金融市場
第5回	企業の国際化と国際金融取引
第6回	金融のグローバル化と金融機関
第7回	金融リスクのグローバル管理
第8回	グローバルインバランスとその調整
第9回	開発金融の諸問題
第10回	変容する国際金融ガバナンス
第11回	パックスブリタニカの衰退
第12回	パックスアメリカナの時代
第13回	EUの通貨統合と新たな時代
第14回	金融グローバル化と国際通貨体制
第15回	国際金融における新たな潮流～仮想通貨について
第16回	まとめ

到達目標

国際金融市場における現実の事象を、理論的に説明できる能力を取得することを到達目標とする。また、国際金融に関連する論文作成の理論的支柱となるレベルを目指す。

履修上の注意

金融論の基礎を履修していることが望ましい。(必須ではない)

評価方法

ゼミへの取組の積極性、理解度などから総合的に評価する。

テキスト

授業中に指定する。

授業概要

貨幣論の学説史、貨幣論の本質と機能に関する理論、国際通貨制度の歴史、現代の通貨問題についての内容を、現代の貨幣理論において基礎となる形成から発展までの理論史を中心に、貨幣について深く、学問的に考察できるように指導する。講義は、講義形式とディスカッションと組み合わせた形で行う。また、特定のテーマについての報告も求める。

授業計画

- 第1回 ガイダンス（この科目で学ぶこと、履修するうえでのルール説明）
- 第2回 （テキスト第1章）貨幣の価値(1)
- 第3回 （テキスト第1章）貨幣の価値(2)
- 第4回 （テキスト第2章）貨幣の変容
- 第5回 （テキスト第3章）貨幣数量説
- 第6回 （テキスト第4章）貨幣の管理
- 第7回 （テキスト第6章）世界貨幣と基軸通貨(1)
- 第8回 （テキスト第6章）世界貨幣と基軸通貨(2)
- 第9回 （テキスト第7章）変動為替相場制(1)
- 第10回 （テキスト第7章）変動為替相場制(2)
- 第11回 （テキスト第8章）最適通貨圏とユーロ(1)
- 第12回 （テキスト第8章）最適通貨圏とユーロ(2)
- 第13回 （テキスト第9章）アジア通貨危機(1)
- 第14回 （テキスト第9章）アジア通貨危機(2)
- 第15回 （テキスト第10章）国際通貨の2050年への展望
- 第16回 期末試験

到達目標

貨幣論を修士論文の課題とする、または貨幣論に関心を持つ学生に対して、授業を通して学術論文を理解する学力を養い、貨幣論の抱えるテーマを学説史から理解する。貨幣と市場経済の関係を巨視的に理解する。

履修上の注意

自分の問題・関心をもって授業に臨む。自分のテーマを報告する機会を設ける。各授業回ともディスカッションをする。自ら進んで学ぶ姿勢が必要である。

予習・復習

- (1) 授業計画にしたがい、自らレジュメを作成し、事前に授業内容を必要活十分に把握する。
- (2) テキストや指示した参考文献等を自ら進んで読み、常に自身の研究・論文の構想を計画する。

評価方法

- ①授業への取り組み（60%）、②レポートおよび口頭試問による評価（40%）で評価する。

テキスト

- ・教科書名：『貨幣理論の現代的課題—国際通貨の現状と展望』
- ・著者名：奥山忠信
- ・出版社名：社会評論社
- ・出版年（ISBN）：2013年（978-7845-1821-0）

授業概要

銀行で、いわゆる国債窓販やバンクディーリングの商品開発企画（1980年代）、証券信託（ファンドトラスト）や年金基金信託の運用マネージ業務（1980年代）、銀行と証券会社で株式公開支援やM&A仲介業務（1990年代、2000年代）等を経験したことを活かして、個別の事例を具体的に掘り下げていく。具体的には、講師は、公認会計士、証券アナリスト、証券外務員などの資格を保有し、銀行と証券会社に勤務したので、いわゆる金融商品会計や税制についても精通している。なお、税理士資格取得を目標とする受講生が履修する場合、各回の授業に、証券税制が、証券市場にどのような影響を与えたかについても、触れていくこととする。

授業計画

第1回	証券市場と国民経済
第2回	日本の証券市場の歴史
第3回	株式発行市場
第4回	株式流通市場
第5回	公社債発行市場
第6回	公社債流通市場
第7回	デリバティブ市場
第8回	証券化商品市場
第9回	金融商品取引所等
第10回	証券取引の行為規制と証券行政
第11回	金融商品取引業（証券業）
第12回	資産運用業
第13回	投資信託
第14回	情報開示制度
第15回	証券税制
第16回	総括と期末レポート

到達目標

銀行（間接金融）と証券（直接金融）の違いを理解できるようになる。
世の中で証券化が急速に発展していったが、その功罪を理解でき、個々人の貯蓄や投資判断にも活用することができるようになる。

履修上の注意

ある程度、金融や証券の知識があった方が良いが、なくても理解できるような授業とする。具体的には、大学院は履修者が少ないのが通例であり、いわゆる演習形式の授業運営を行う。

予習・復習

予習は、後述のテキストを授業テーマに合わせて、事前に読んでおいてほしい。また、疑問点をみつけて、自分なりの考えをまとめておいて、授業での討論にそなえてください。

評価方法

毎回の演習形式での質疑応答やミニテスト（合計50%）と期末レポート（50%）を総合評価。

テキスト

図説日本の証券市場 2022年版。書店で購入のほか、全文を日本証券経済研究所のHPからPDFで入手可。

授業概要

リスクマネジメントの基本的な知識を習得することを目指す。金融機関のリスク管理を中心にリスクとは何か、“リスクと取る”とはなんのことなのか、リスクをコントロールするとは何をするのかといった基本的な事項を説明し、企業経営をする上持つべきリスクガバナンスの視点を得ることを目指す。リスクマネジメントのグローバル標準はCOSOのフレームワークと考えられることから、COSOベースのフレームワークに沿って議論を進める。

授業計画

第1回	オリエンテーション
第2回	リスク管理解題
第3回	金融リスク
第4回	その他のリスク
第5回	COSOの考え方1
第6回	COSOの考え方2
第7回	学生からのフィードバック
第8回	リスクアセスメント
第9回	コントロール
第10回	ガバナンス
第11回	リスクシナリオ1
第12回	リスクシナリオの学生フィードバック
第13回	金融での規制（BIS規制）
第14回	学生からの最終フィードバック
第15回	ラップアップ
第16回	予備

到達目標

現代最先端のリスク管理の考え方の理解

履修上の注意

大学院の講義であることから、講義主体ではなく学生による意見表明やショートレジュメによる発表を予定し、そうした貢献により評価を行う。

予習・復習

学生フィードバックに向けた準備が必要。

評価方法

講義に対する貢献度により評価

テキスト

授業概要

＜研究指導 I＞ 私の専門分野は、金融システム、コーポレート・ファイナンス、コーポレート・ガバナンス、ESG などの理論および実証研究であり、それらの分野における論文作成に必要なとされる専門的な知識および実証分析手法を修得するとともに、最終的には問題意識を深め、かつ絞り込みます。

＜研究指導 II＞ 修士論文の執筆に関する指導を行います。とりわけ重要な点は、第 1 に論文の着眼点や目的をはっきりさせ自分の論文のオリジナルな貢献を明確化すること、第 2 に先行研究のサーベイを過不足なく実施すること、第 3 に適切な仮説を設定し実証分析を丁寧に進めること、そして最後に得られた結論を適切にまとめることです。

授業計画

＜研究指導 I＞		＜研究指導 II＞	
第 1 回	ガイダンス：研究指導の概要	第 1 回	ガイダンス：修士論文完成までのプロセス確認
第 2 回	先行研究の収集	第 2 回	修士論文計画書の再検討
第 3 回	金融システムに関する先行研究の読解	第 3 回	先行研究サーベイの報告
第 4 回	同上	第 4 回	同上
第 5 回	同上	第 5 回	同上
第 6 回	同上	第 6 回	同上
第 7 回	コーポレート・ファイナンスに関する先行研究の読解	第 7 回	同上
第 8 回	同上	第 8 回	同上
第 9 回	同上	第 9 回	仮説と実証モデルの検討
第 10 回	同上	第 10 回	同上
第 11 回	同上	第 11 回	同上
第 12 回	コーポレート・ガバナンスに関する先行研究の読解	第 12 回	同上
第 13 回	同上	第 13 回	データセット構築に関する報告
第 14 回	同上	第 14 回	同上
第 15 回	同上	第 15 回	同上
第 16 回	同上	第 16 回	実証結果報告
第 17 回	同上	第 17 回	実証モデルの再検討
第 18 回	ESG に関する先行研究の読解	第 18 回	実証結果報告
第 19 回	同上	第 19 回	実証モデルの再検討
第 20 回	同上	第 20 回	実証結果報告
第 21 回	同上	第 21 回	実証モデルの再検討
第 22 回	実証分析手法の修得	第 22 回	修士論文 1 次稿の完成と報告
第 23 回	同上	第 23 回	修士論文 1 次稿の問題点の洗い出しと修正
第 24 回	同上	第 24 回	同上
第 25 回	同上	第 25 回	同上
第 26 回	修士論文計画書の検討	第 26 回	修士論文 2 次稿の完成と報告
第 27 回	同上	第 27 回	修士論文 2 次稿の問題点の洗い出しと修正
第 28 回	同上	第 28 回	同上
第 29 回	修士論文計画書の完成	第 29 回	修士論文最終版の完成と報告
第 30 回	第 1 年次のまとめ	第 30 回	同上

到達目標

- 最終的にアカデミックに重要な貢献を含んだ学術論文を執筆することができる。

履修上の注意

修士論文を執筆するというのは、大変な労力を要しますので、十分な覚悟を持って取り組んでください。

評価方法

各回の報告と論文の進捗状況 50%、修士論文の内容 50%。

テキスト

必要な文献は、適宜指示します。

授業概要

＜研究指導 I：1 年次＞ 主に論文作成に必要な基本的能力の習得および修士論文テーマの絞り込みを行う。前半は、ヘルスケアサービスに関するテキストを使用し、輪読形式で発表および検討を行う。ヘルスケアサービス・マネジメントに必要な考え方と問題点について議論し理解を深められるよう指導する。後半は受講者個々人のテーマの絞り込みや先行研究を行う。
 ＜研究指導 II：2 年次＞ 論文執筆計画から完成までの一連のプロセスを遂行する。受講者個々人の研究テーマに添った研究アプローチに基づき、論文作成を指導する。文献収集および文献検討、論文執筆等、それぞれに関するスキルを身に付ける。

授業計画

＜研究指導 I＞		＜研究指導 II＞	
第 1 回	ガイダンスとフリーディスカッション	第 1 回	1 年次の振り返り
第 2 回	ヘルスケアサービスについてのディスカッション	第 2 回	論文作成前の課題の絞り込みと設定
第 3 回	ヘルスケアサービス・マネジメントについてのディスカッション	第 3 回	文献収集①
第 4 回	テキスト輪読① Part I-①	第 4 回	文献収集②
第 5 回	テキスト輪読② Part I-②	第 5 回	文献収集③
第 6 回	テキスト輪読③ Part I-③	第 6 回	文献研究発表
第 7 回	テキスト輪読④ Part II-①	第 7 回	論文テーマの設定①
第 8 回	テキスト輪読⑤ Part II-②	第 8 回	論文テーマの設定②
第 9 回	テキスト輪読⑥ Part II-③	第 9 回	論文テーマの設定③
第 10 回	テキスト輪読⑦ Part III-①	第 10 回	論文テーマの決定①
第 11 回	テキスト輪読⑧ Part III-②	第 11 回	論文テーマの決定②
第 12 回	研究方法の検討	第 12 回	研究目的の絞り込み①
第 13 回	質的研究と量的研究	第 13 回	研究目的の絞り込み②
第 14 回	実証研究と理論研究	第 14 回	研究方法の決定①
第 15 回	仮説の有無	第 15 回	研究方法の決定②
第 16 回	期末レポート試験	第 16 回	期末レポート試験（中間とりまとめ）
第 17 回	エビデンス、クリティカル・シンキング	第 17 回	論文作成①
第 18 回	社会科学分野研究の特徴について	第 18 回	論文作成②
第 19 回	課題の抽出について	第 19 回	論文作成③
第 20 回	研究目的の明確化	第 20 回	論文作成④
第 21 回	研究テーマの設定①	第 21 回	論文作成⑤
第 22 回	研究テーマの設定②	第 22 回	論文作成⑥
第 23 回	研究テーマの設定③	第 23 回	論文作成⑦
第 24 回	研究テーマの設定④	第 24 回	論文作成⑧
第 25 回	文献研究①	第 25 回	論文作成⑨
第 26 回	文献研究②	第 26 回	論文作成⑩
第 27 回	文献研究③	第 27 回	論旨作成①
第 28 回	文献研究④	第 28 回	論旨作成②
第 29 回	文献研究⑤	第 29 回	論旨作成③
第 30 回	研究内容発表	第 30 回	総括①
第 31 回	まとめ	第 31 回	総括②
第 32 回	期末レポート試験	第 32 回	期末試験 論文発表会

到達目標

＜研究指導 I＞
 ・研究テーマの絞り込みができる。／・文献収集や文献検討ができる。／・英文文献研究ができる。
 ＜研究指導 II＞
 ・論文執筆までの一連のプロセスが理解できる。／・論文執筆のために必要なスキルが身に付けられる。／・論文を完成できる。

履修上の注意

＜研究指導 I＞ テーマの絞り込みに関しては、じっくり考え、悩んで、よく検討するようにしてください。予習・復習各 90 分程度。
 ＜研究指導 II＞ できるだけ計画的に進められるよう心がけてください。予習・復習各 90 分程度。

評価方法

＜研究指導 I＞ 授業中の報告、論文への積極的取り組み 50%、期末レポート試験 50%で評価する。
 ＜研究指導 II＞ 論文の完成度に応じて評価する。論文執筆 100%。

テキスト

＜研究指導 I＞ Ann Scheck McAlearney, Anthony R. Kovner, Health Services Management-A Case Study Approach, AUPHA
 ＜研究指導 II＞ 受講生の研究テーマに応じて授業中に適宜指示する。

授業概要

佐藤メソッドという独自の内容・方法により、1対1で個別指導を行う。この科目においては、教員が、一定の報告書に基づいて、論文の進行管理を行う（下記「履修上の注意」を参照。）。教員から効果的、効率的に指導を受けるには、論文に、意味のある進捗があることが前提であるので、日々着実に、しっかりと進めて臨むことが、必要である。

授業計画

＜研究指導 I＞		＜研究指導 II＞	
第1回	ガイダンス：論文テーマ	第1回	論理展開の再検討：報告・指導
第2回	論文テーマ：報告・指導	第2回	論理展開の再検討：報告・指導
第3回	論文テーマ：報告・指導	第3回	論理展開の再検討：報告・指導
第4回	論文テーマ：報告・指導	第4回	論理展開の再検討：報告・指導
第5回	文献収集：報告・指導	第5回	質・内容の向上（序章）報告・指導
第6回	文献収集：報告・指導	第6回	質・内容の向上（序章）報告・指導
第7回	序章：報告・指導	第7回	質・内容の向上（第1章）報告・指導
第8回	第1章（事案概要・問題所在）	第8回	質・内容の向上（第1章）報告・指導
第9回	第1章（事案概要・問題所在）	第9回	質・内容の向上（第1章）報告・指導
第10回	第2章（学説等検討）報告・指導	第10回	質・内容の向上（第1章）報告・指導
第11回	第2章（学説等検討）報告・指導	第11回	質・内容の向上（第2章）報告・指導
第12回	第2章（学説等検討）報告・指導	第12回	質・内容の向上（第2章）報告・指導
第13回	第2章（学説等検討）報告・指導	第13回	質・内容の向上（第2章）報告・指導
第14回	第2章（学説等検討）報告・指導	第14回	質・内容の向上（第2章）報告・指導
第15回	第2章（学説等検討）報告・指導	第15回	質・内容の向上（第2章）報告・指導
第16回	第2章（学説等検討）報告・指導	第16回	質・内容の向上（第2章）報告・指導
第17回	第3章（裁判例・解釈検討）報告・指導	第17回	質・内容の向上（第3章）報告・指導
第18回	第3章（裁判例・解釈検討）報告・指導	第18回	質・内容の向上（第3章）報告・指導
第19回	第3章（裁判例・解釈検討）報告・指導	第19回	質・内容の向上（第3章）報告・指導
第20回	第3章（裁判例解釈検討）報告・指導	第20回	質・内容の向上（第3章）報告・指導
第21回	第3章（裁判例認定事実検討）報告・指導	第21回	質・内容の向上（第3章）報告・指導
第22回	第3章（裁判例認定事実検討）報告・指導	第22回	質・内容の向上（第3章）報告・指導
第23回	第3章（裁判例認定事実検討）報告・指導	第23回	質・内容の向上（第3章）報告・指導
第24回	第3章（裁判例認定事実検討）報告・指導	第24回	質・内容の向上（第4章）報告・指導
第25回	第3章（裁判例認定事実検討）報告・指導	第25回	質・内容の向上（第4章）報告・指導
第26回	第4章（当てはめ検討）報告・指導	第26回	質・内容の向上（第4章）報告・指導
第27回	第4章（当てはめ検討）報告・指導	第27回	質・内容の向上（終章）報告・指導
第28回	終章（まとめ）：報告・指導	第28回	質・内容の向上（終章）報告・指導
第29回	終章（課題・弱点補強）：報告・指導	第29回	まとめ（最終試験準備）
第30回	まとめ	第30回	まとめ（最終試験準備）

到達目標

研究指導 I の 1 年間で、ほぼ、粗々の論文が全体として出来上がることを目標とする。研究指導 II では、論理の崩れの再チェック（木に竹を接いだようになっていないか）等の実施、各章の補強作業（追加的資料収集を含む）を積極的に進め、最後の 3 か月はテニヲハのみの修正だけで終われる余裕のある進捗の確保をすること。こうした地道で着実な努力によって、「学ぶ楽しさ、知るよろこび」を実感できるはずである。

履修上の注意

まず、論文テーマを決定する。未決定の者は、当初3か月内で三点セット（事案概要・三者比較表・論者比較表）で決定する。研究指導 I・II を通じて、可能な限り、四点セット（説明・質問等メモ、要旨、本文、論理展開図）の作成を通じて、指導を受ける。テキストは暗記するぐらいに、何度も熟読して臨むこと。なお、履修生は社会人院生が含まれるので、この科目も含め、修士論文関係科目を、基本的に、オンラインで講義・指導する。

評価方法

基本的に、研究の進捗と深度（発表内容の質の高さを含む）に 100%配分で評価する。

テキスト

独自テキストを配付する。参考書は、基本的に、金子宏著「租税法（第 24 版）」（弘文堂、2021 年）とする。

授業概要

研究指導 I：1 年次には、修士論文作成のための基礎的知識と方法論を指導する。また、大企業、中小企業、地域企業というキーワードに基づく企業活動の実態が理解できるようにする。論文のテーマでは、受講生個々に応じた指導を行う。

研究指導 II：2 年次には、1 年時に確定した研究テーマに沿った論文作成のための指導を行う。論文作成にあたっては、様々な視点から直しを行い、より水準の高い内容となるよう指導する。

授業計画

<研究指導 I>		<研究指導 II>	
第1回	オリエンテーション	第1回	論文のテーマと構成の確認
第2回	受講生の問題意識の確認	第2回	論文構成の検討と議論
第3回	研究テーマに関する議論	第3回	論文構成の検討と議論
第4回	研究テーマに関する議論	第4回	論文構成の検討と議論
第5回	研究テーマに関する議論	第5回	中間報告の準備
第6回	研究テーマに関する先行研究	第6回	中間報告の準備
第7回	研究テーマに関する先行研究	第7回	中間報告の見直し
第8回	研究テーマに関する先行研究	第8回	論文構成の再検討と議論
第9回	基本文献の収集と報告	第9回	論文構成の再検討と議論
第10回	基本文献の収集と報告	第10回	論文構成の再検討と議論
第11回	基本文献の収集と報告	第11回	論文構成の再検討と議論
第12回	日本産業と大企業	第12回	論文構成の再検討と議論
第13回	日本産業と大企業	第13回	論文構成の再検討と議論
第14回	日本産業と地域企業	第14回	論文構成の再検討と議論
第15回	日本産業と地域企業	第15回	論文構成の再検討と議論
第16回	日本産業と中小企業	第16回	中間報告の準備
第17回	日本産業と中小企業	第17回	中間報告の準備
第18回	日本産業の海外生産	第18回	中間報告の準備
第19回	日本産業と大企業	第19回	報告の反省と課題の抽出
第20回	研究テーマと先行研究の検討	第20回	報告の反省と課題の抽出
第21回	研究テーマと先行研究の検討	第21回	論文の構成と報告
第22回	研究テーマと先行研究の検討	第22回	論文の構成と報告
第23回	研究テーマと先行研究の検討	第23回	論文の構成と報告
第24回	論文構成の検討と議論	第24回	論文の構成と報告
第25回	論文構成の検討と議論	第25回	論文の構成と報告
第26回	論文構成の検討と議論	第26回	論文の構成と報告
第27回	論文構成の検討	第27回	論文の構成と報告
第28回	論文構成の検討	第28回	論文の構成と報告
第29回	論文構成の検討	第29回	最終チェック
第30回	論文の内容を報告	第30回	最終チェックと今後の研究課題の再確認

到達目標

・大企業、地域企業、中小企業を学ぶことで、国内外の経済社会の変化と今後を展望できる能力を身に付ける子とを目標とします。

履修上の注意

・研究指導 I：研究テーマの文献などを理解すると共に、論点を明確にするという意識を持つこと。
 ・研究指導 II：論文構成における論理展開を繰り返し検討すると共に、報告、議論を重ねることが重要です。

評価方法

・研究指導 I：報告と議論、そして課題に対するレポートにより総合的に評価します。
 ・研究指導 II：論文の研究水準により評価します。

テキスト

・研究指導 I：受講生の研究テーマの調査・分析の進捗度に応じて、授業中に指示する。
 ・研究指導 II：受講生の論文作成の進捗度に応じて、授業中に指示する。

授業概要

<研究指導 I : 1 年次>論文作成のための専門知識およびデータ収集・分析手法の習得、史料・資料の分析力の養成を行う。研究テーマを絞り込むために、関連分野の基本文献および最新の研究成果を読破し、学生の問題意識の明確化・具体化を図る。
 <研究指導 II : 2 年次>論文草稿の執筆と中間報告のための綿密な計画、スケジュールを作成し、スケジュールに沿った研究を進める。草稿の執筆や中間報告を作成していく過程において、自らの研究のオリジナリティーを発見する。作成した初稿を推敲し、推敲結果の吟味と修正を頻繁に繰り返すことで研究の深化と精緻化を図っていく。

授業計画

<研究指導 I >		<研究指導 II >	
第 1 回	オリエンテーション	第 1 回	1 年次の成果と不足点、問題点、今後の作業の確認
第 2 回	学生の問題関心の確認	第 2 回	不足部分関連文献の精読と理解
第 3 回	研究テーマ確定のための文献の収集、整理	第 3 回	関連文献の精読と理解、文献のリストアップ
第 4 回	関連文献の報告、議論	第 4 回	修士論文執筆計画、スケジュールの確認
第 5 回	関連文献の報告、議論	第 5 回	修士論文の執筆、報告、議論、修正、補充
第 6 回	関連文献の報告、議論	第 6 回	修士論文の執筆、報告、議論、修正、補充
第 7 回	関連文献の報告、議論	第 7 回	第 1 回中間報告の準備
第 8 回	関連文献の報告、議論	第 8 回	第 1 回中間報告の準備
第 9 回	研究領域の基本的知識、文献理解度の確認	第 9 回	第 1 回中間報告
第 10 回	研究テーマについての検討と絞り込み	第 10 回	第 1 回中間報告の論点、問題点の整理
第 11 回	研究テーマについての検討と絞り込み	第 11 回	修士論文の執筆、報告、議論、修正、補充
第 12 回	先行研究の検討（文献レビュー）	第 12 回	修士論文の執筆、報告、議論、修正、補充
第 13 回	先行研究の検討（文献レビュー）	第 13 回	修士論文の執筆、報告、議論、修正、補充
第 14 回	先行研究の検討（文献レビュー）	第 14 回	修士論文の執筆、報告、議論、修正、補充
第 15 回	先行研究の検討（文献レビュー）	第 15 回	第 2 回中間報告の準備
第 16 回	中国の企業組織に関する理論の考察 I	第 16 回	第 2 回中間報告の準備
第 17 回	中国の企業組織に関する理論の考察 II	第 17 回	第 2 回中間報告
第 18 回	中国企業における組織・個人関係の考察 I	第 18 回	第 2 回中間報告の反省点の整理
第 19 回	中国企業における組織・個人関係の考察 II	第 19 回	修士論文の執筆と報告
第 20 回	論文構想 I 論点・仮説	第 20 回	修士論文の執筆と報告
第 21 回	論文構想 II 論理展開	第 21 回	修士論文の執筆と報告
第 22 回	論文構想 III 実証的アプローチの可能性	第 22 回	修士論文の初稿の完成
第 23 回	修士論文執筆計画の作成	第 23 回	修士論文の部分的修正・補充・調整
第 24 回	修士論文執筆計画の修正と再作成	第 24 回	修士論文の部分的修正・補充・調整
第 25 回	論文草稿の作成	第 25 回	修士論文の部分的修正・補充・調整
第 26 回	論文草稿の作成	第 26 回	論文の精緻化のための議論と修正
第 27 回	論文草稿の作成	第 27 回	論文の精緻化のための議論と修正
第 28 回	論文草稿の作成	第 28 回	論文の精緻化のための議論と修正
第 29 回	関連研究会での報告と議論	第 29 回	修士論文の最終チェック
第 30 回	論点の批判的再検討	第 30 回	修士論文の公表に関する展望

到達目標

1 年次では関連領域の文献を読破し、専門知識を深めると同時に研究テーマを明確にし、先行研究の検討を行うこと、2 年次では完成度の高い中間報告を目指し、計画的に執筆作業を進め、予定通り修士論文を完成すること。

履修上の注意

指導教官に過度に依存せず、能動的・意欲的に研究に取り組む姿勢を求めたい。

評価方法

研究指導 I（1 年次）研究報告の内容や議論への参加姿勢、与えられた課題の完成度 80%、期末試験 20%で評価する。
 研究指導 II（2 年次）修士論文の完成度（100%）で評価する。

テキスト

授業概要

<研究指導 I> 修士論文に向けた指導と研究・執筆着手を行う。論文テーマを定め、その分野の基本文献や先行論文の収集、研究を行う。論文のルール（論理構成、剽窃禁止、スタイルや数字、文字、番号などのルール）を学ぶ。
 <研究指導 II> 修士論文の作成（研究と執筆）を指導し、修士論文の完成に導く。

授業計画

<研究指導 I>		<研究指導 II>	
第1回	ガイダンス	第1回	ガイダンス、修士論文作成進捗状況報告
第2回	受講院生の関心の明確化のための議論①	第2回	論文作成ロードマップの再検討
第3回	受講院生の関心の明確化のための議論②	第3回	中間報告会（5月開催見込み）への準備①
第4回	関心領域の基本文献研究	第4回	中間報告会への準備②
第5回	関心領域の基本文献研究と議論①	第5回	中間報告会への準備③
第6回	関心領域の基本文献研究と議論②	第6回	中間報告会への準備④
第7回	テーマ設定のための文献研究、報告、議論	第7回	中間報告会への準備⑤
第8回	テーマ設定のための文献研究、報告、議論	第8回	中間報告会（研究発表）
第9回	テーマ設定のための文献研究、報告、議論	第9回	中間報告会での指摘・指導事項の修正、検
第10回	テーマ設定のための文献研究、報告、議論	第10回	修士論文の構成、研究方法等の再確認①
第11回	テーマ設定のための文献研究、報告、議論	第11回	修士論文の構成、研究方法等の再確認②
第12回	テーマ設定のための文献研究、報告、議論	第12回	論文作成ロードマップの確認
第13回	テーマ設定のための文献研究、報告、議論	第13回	修士論文作成
第14回	テーマ設定のための文献研究、報告、議論	第14回	修士論文作成
第15回	テーマ設定のための文献研究、報告、議論	第15回	修士論文作成
第16回	テーマ設定のための文献研究、報告、議論	第16回	修士論文作成
第17回	研究テーマの絞り込み、報告	第17回	修士論文作成
第18回	論文作成ロードマップの作成	第18回	修士論文作成
第19回	研究報告と議論、論点整理①	第19回	修士論文作成
第20回	研究報告と議論、論点整理②	第20回	中間報告会（11月開催見込み）への準備①
第21回	学術論文の書き方、ルールについての指導	第21回	中間報告会への準備②
第22回	修士論文の草稿作成①	第22回	中間報告会（研究発表）
第23回	修士論文の草稿作成②	第23回	中間報告会での指摘・指導事項の修正、検
第24回	修士論文の草稿作成③	第24回	修士論文（最終論文）の作成
第25回	修士論文の草稿作成④	第25回	修士論文（最終論文）の作成
第26回	修士論文の草稿作成⑤	第26回	修士論文（最終論文）の作成
第27回	修士論文の草稿作成⑥	第27回	修士論文（最終論文）の作成
第28回	修士論文の草稿作成⑦	第28回	修士論文の最終チェック
第29回	修士論文の草稿作成⑧	第29回	最終試験の準備
第30回	第1年次のまとめ。	第30回	修士論文の問題点と今後の課題の確認

到達目標

<研究指導 I> 研究テーマを明確にし、基本文献を読み、修士論文作成に着手。研究、論文執筆を進める。
 <研究指導 II> 計画的に論文執筆作業を行い、修士論文を完成する。

履修上の注意

修士論文を完成するためには旺盛な好奇心、研究意欲、そして忍耐と時間を必要とします。論文作成ロードマップから逸脱しない様に、自分自身で時間・スケジュール管理を行っていくことが必要とされます。

評価方法

<研究指導 I> 問題意識を持ち主体的に修士論文作成に向かっているかを評価する。
 <研究指導 II> 修士論文の完成水準によって評価する。

テキスト

学生の状況に応じて適宜指示する。

授業概要

<研究指導 I : 1 年次> 研究を行うための基本的な知識と素養を習得するための指導を行う。まずは文献の輪読を行いながら、文献の精読・報告、内容についての議論、等々を通じて研究するための基本的な素養を身につける。次に各自が研究したいテーマ論に関する諸テーマに基づく研究報告を行う。

<研究指導 II : 2 年次> 各自が論文テーマを設定し修士論文作成するための研究指導を行う。各自のテーマに関連する文献収集および研究方法、論文作成の基本的な手法の指導を行う。論文作成の状況に応じて研究報告し議論しながら修士論文の完成を目指す。

授業計画

<研究指導 I >		<研究指導 II >	
第1回	ガイダンス	第1回	ガイダンス
第2回	テーマに関する文献研究	第2回	テーマに関する文献研究
第3回	テーマに関する文献研究	第3回	テーマに関する文献研究
第4回	テーマに関する文献研究	第4回	テーマに関する文献研究
第5回	テーマに関する文献研究	第5回	テーマに関する文献研究
第6回	テーマに関する文献研究	第6回	テーマに関する文献研究
第7回	テーマに関する文献研究	第7回	テーマに関する文献研究
第8回	テーマに関する文献研究	第8回	テーマに関する文献研究
第9回	文献に関する研究のまとめ	第9回	文献に関する研究のまとめ
第10回	テーマに関する事例研究	第10回	テーマに関する事例研究
第11回	テーマに関する事例研究	第11回	テーマに関する事例研究
第12回	テーマに関する事例研究	第12回	テーマに関する事例研究
第13回	テーマに関する事例研究	第13回	テーマに関する事例研究
第14回	事例研究のまとめ	第14回	事例研究のまとめ
第15回	研究報告	第15回	研究報告
第16回	研究テーマの検討	第16回	研究テーマの検討
第17回	研究テーマの検討	第17回	研究テーマの検討
第18回	研究テーマの報告	第18回	研究テーマの報告
第19回	研究テーマに関する文献探索	第19回	研究テーマに関する文献探索
第20回	研究テーマに関する文献探索	第20回	研究テーマに関する文献探索
第21回	研究テーマに関する文献探索	第21回	研究テーマに関する文献探索
第22回	研究テーマに関する文献研究	第22回	研究テーマに関する文献研究
第23回	研究テーマに関する文献研究	第23回	研究テーマに関する文献研究
第24回	研究テーマに関する文献研究	第24回	研究テーマに関する文献研究
第25回	研究テーマに関する事例研究	第25回	研究テーマに関する事例研究
第26回	研究テーマに関する事例研究	第26回	研究テーマに関する事例研究
第27回	研究テーマに関する事例研究	第27回	研究テーマに関する事例研究
第28回	小論文の作成	第28回	小論文の作成
第29回	小論文の作成	第29回	小論文の作成
第30回	小論文の研究報告	第30回	小論文の研究報告

到達目標

研究指導 I : 修士論文のテーマ設定と先行研究の分析

研究指導 II : 修士論文の完成

履修上の注意

1 年次において、テーマ論の体系的理解を目指し、相当の分量の文献研究を行う。また修士論文につながる研究テーマを設定し小論文を執筆しなければならない。

2 年次において、研究アプローチについて理解し、先行研究の分析を行い、最終的に論文作成へと向かうため、先行研究に関する文献および研究アプローチについての文献を検討する必要がある。

評価方法

1 年次において、研究報告と議論の質および積極性により評価する。

2 年次において、中間報告を必須とし修士論文の内容と水準により評価する。

テキスト

授業内で提示する。

授業概要

〈研究指導Ⅰ〉 修士論文のテーマの設定・問題意識、修士論文の基礎となる文献学習などを中心とし、修士論文のアウトラインを作成する。また、学術論文の書き方を学ぶ。

〈研究指導Ⅱ〉 研究指導Ⅰでのアウトラインに基づき、修士論文の各章・各節の内容について議論を重ね、オリジナルのある研究を進める。修士論文を完成させる。

授業計画**<研究指導Ⅰ>**

- 第 1 回 ガイダンス
- 第 2 回 修論のテーマ・問題意識についての議論
- 第 3 回 修論のテーマ・問題意識についての議論
- 第 4 回 基礎文献についての報告と議論(1)
- 第 5 回 基礎文献についての報告と議論(2)
- 第 6 回 基礎文献についての報告と議論(3)
- 第 7 回 基礎文献についての報告と議論(4)
- 第 8 回 基礎文献についての報告と議論(5)
- 第 9 回 基礎文献についての報告と議論(6)
- 第 10 回 基礎文献についての報告と議論(7)
- 第 11 回 修論テーマに関する文献の報告と議論(1)
- 第 12 回 修論テーマに関する文献の報告と議論(2)
- 第 13 回 修論テーマに関する文献の報告と議論(3)
- 第 14 回 修論テーマに関する文献の報告と議論(4)
- 第 15 回 修論テーマに関する文献の報告と議論(5)
- 第 16 回 修論テーマに関する文献の報告と議論(6)
- 第 17 回 修論テーマに関する文献の報告と議論(7)
- 第 18 回 問題意識に基づくアウトラインの作成(1)
- 第 19 回 問題意識に基づくアウトラインの作成(2)
- 第 20 回 問題意識に基づくアウトラインの作成(3)
- 第 21 回 問題意識に基づくアウトラインの作成(4)
- 第 22 回 第 2 レベルのアウトラインの作成(1)
- 第 23 回 第 2 レベルのアウトラインの作成(2)
- 第 24 回 第 2 レベルのアウトラインの作成(3)
- 第 25 回 第 2 レベルのアウトラインの作成(4)
- 第 26 回 問題意識・アウトラインに基づく文献(1)
- 第 27 回 問題意識・アウトラインに基づく文献(2)
- 第 28 回 問題意識・アウトラインに基づく文献(3)
- 第 29 回 問題意識・アウトラインに基づく文献(4)
- 第 30 回 文献報告と議論の総復習

<研究指導Ⅱ>

- 第 1 回 ガイダンス、研究指導Ⅰの確認
- 第 2 回 修論各章・各節の内容を議論する(1)
- 第 3 回 修論各章・各節の内容を議論する(2)
- 第 4 回 修論各章・各節の内容を議論する(3)
- 第 5 回 一次中間報告会に向けた準備(1)
- 第 6 回 一次中間報告会に向けた準備(2)
- 第 7 回 中間報告会のふりかえりと今後の方向(1)
- 第 8 回 中間報告会のふりかえりと今後の方向(2)
- 第 9 回 修論各章・各節の内容を議論する(4)
- 第 10 回 修論各章・各節の内容を議論する(5)
- 第 11 回 修論各章・各節の内容を議論する(6)
- 第 12 回 修論各章・各節の内容を議論する(7)
- 第 13 回 修論各章・各節の内容を議論する(8)
- 第 14 回 修論各章・各節の内容を議論する(9)
- 第 15 回 修士論文執筆の行程表(予定)の確認
- 第 16 回 修士論文執筆の現在地の確認
- 第 17 回 修士論文執筆状況の報告・議論・修正(1)
- 第 18 回 修士論文執筆状況の報告・議論・修正(2)
- 第 19 回 二次中間報告会に向けた準備(1)
- 第 20 回 二次中間報告会に向けた準備(2)
- 第 21 回 修士論文執筆状況の報告・議論・修正(3)
- 第 22 回 修士論文執筆状況の報告・議論・修正(4)
- 第 23 回 修士論文執筆状況の報告・議論・修正(5)
- 第 24 回 修士論文執筆状況の報告・議論・修正(6)
- 第 25 回 修士論文執筆状況の報告・議論・修正(7)
- 第 26 回 修士論文執筆状況の報告・議論・修正(8)
- 第 27 回 修士論文執筆状況の報告・議論・修正(9)
- 第 28 回 修士論文のチェック
- 第 29 回 修士論文の最終チェック
- 第 30 回 修士論文に基づく今後の研究発展

到達目標

〈研究指導Ⅰ〉 テーマ設定、問題意識に基づき、関連領域の文献を読破して内容をまとめ、専門知識を深める。

〈研究指導Ⅱ〉 計画的に執筆作業を進め、予定通り修士論文を完成する。

履修上の注意

指導教員に過度に依存することなく、自主的に修士論文執筆に取り組む姿勢が求められる。

評価方法

問題意識を理論と結びつけ、主体的に修士論文へ向かって進んでいるかどうかを評価する。

テキスト

必携のテキストは用いない。履修生自ら読むべき文献・論文を探索する(指導教員はそのサポートに徹する)。

授業概要

＜研究指導 I：1 年次＞ 修士論文作成のための基礎的知識と方法を指導する。また、テーマに関連する学術論文や文献を読み、基本となるレビューを行う。
 ＜研究指導 II：2 年次＞ 研究テーマに添った研究指導に基づき、論文を作成・完成させる。

授業計画

＜研究指導 I＞		＜研究指導 II＞	
第 1 回	オリエンテーション	第 1 回	オリエンテーション
第 2 回	文献レビューの方法	第 2 回	研究進捗報告①
第 3 回	学術論文の書き方	第 3 回	文献レビューと議論⑳
第 4 回	文献レビューと議論①	第 4 回	文献レビューと議論㉑
第 5 回	文献レビューと議論②	第 5 回	研究進捗報告②
第 6 回	文献レビューと議論③	第 6 回	文献レビューと議論㉒
第 7 回	文献レビューと議論④	第 7 回	文献レビューと議論㉓
第 8 回	文献レビューと議論⑤	第 8 回	研究進捗報告③
第 9 回	研究テーマ発表①	第 9 回	研究進捗報告④
第 10 回	文献レビューと議論⑥	第 10 回	研究進捗報告⑤
第 11 回	文献レビューと議論⑦	第 11 回	文献レビューと議論㉔
第 12 回	文献レビューと議論⑧	第 12 回	研究進捗報告⑥
第 13 回	文献レビューと議論⑨	第 13 回	研究進捗報告⑦
第 14 回	研究テーマ発表②	第 14 回	第 2 回中間報告
第 15 回	第 1 回中間報告	第 15 回	第 2 回中間報告
第 16 回	研究テーマ発表③	第 16 回	修士論文執筆状況報告①
第 17 回	文献レビューと議論⑩	第 17 回	修士論文執筆状況報告②
第 18 回	文献レビューと議論⑪	第 18 回	修士論文執筆状況報告③
第 19 回	文献レビューと議論⑫	第 19 回	修士論文執筆状況報告④
第 20 回	文献レビューと議論⑬	第 20 回	修士論文執筆状況報告⑤
第 21 回	文献レビューと議論⑭	第 21 回	最終報告
第 22 回	研究テーマ発表④	第 22 回	最終報告
第 23 回	文献レビューと議論⑮	第 23 回	修士論文執筆状況報告⑥
第 24 回	文献レビューと議論⑯	第 24 回	修士論文執筆状況報告⑦
第 25 回	文献レビューと議論⑰	第 25 回	修士論文執筆状況報告⑧
第 26 回	文献レビューと議論⑱	第 26 回	修士論文執筆状況報告⑨
第 27 回	研究計画発表①	第 27 回	修士論文の最終確認
第 28 回	文献レビューと議論⑲	第 28 回	修士論文の完成報告
第 29 回	研究計画発表②	第 29 回	修士論文の完成報告
第 30 回	1 年次最終報告	第 30 回	修士論文の完成報告

到達目標

・一定の水準の学術研究を行うことができる。

履修上の注意

大学院生として、真摯に研究活動に取り組むこと。

評価方法

修士論文への取り組みで評価します。

テキスト

特に指定しない。

授業概要

＜研究指導Ⅰ：1年次＞ 経営学における学術論文や文献を丁寧に読み、経営学特有の考え方や論文の執筆の仕方について議論します。

＜研究指導Ⅱ：2年次＞ 受講者それぞれの研究テーマに添った研究指導に基づき、論文を作成・完成させます。

授業計画

＜研究指導Ⅰ＞		＜研究指導Ⅱ＞	
第1回	ガイダンス	第1回	ガイダンス
第2回	輪読①	第2回	研究の背景・問題意識①
第3回	輪読②	第3回	研究の背景・問題意識②
第4回	輪読③	第4回	リサーチクエスションの設定①
第5回	輪読④	第5回	リサーチクエスションの設定②
第6回	輪読⑤	第6回	リサーチクエスションの設定③
第7回	輪読⑥	第7回	方法論の検討・決定①
第8回	輪読⑦	第8回	方法論の検討・決定②
第9回	輪読⑧	第9回	先行研究調査①
第10回	輪読⑨	第10回	先行研究調査②
第11回	輪読⑩	第11回	先行研究調査③
第12回	経営学研究の方法論①	第12回	先行研究調査④
第13回	経営学研究の方法論②	第13回	データの収集・分析①
第14回	経営学研究の方法論③	第14回	データの収集・分析②
第15回	経営学研究の方法論④	第15回	データの収集・分析③
第16回	学術論文を読む①	第16回	データの収集・分析④
第17回	学術論文を読む②	第17回	データの収集・分析⑤
第18回	学術論文を読む③	第18回	修士論文の構成検討①
第19回	学術論文を読む④	第19回	修士論文の構成検討②
第20回	学術論文を読む⑤	第20回	修士論文執筆①
第21回	研究目的についてディスカッション	第21回	修士論文執筆②
第22回	研究テーマの設定①	第22回	修士論文執筆③
第23回	研究テーマの設定②	第23回	修士論文執筆④
第24回	先行研究調査・発表①	第24回	修士論文執筆⑤
第25回	先行研究調査・発表②	第25回	修士論文執筆⑥
第26回	先行研究調査・発表③	第26回	修士論文執筆⑦
第27回	先行研究調査・発表④	第27回	修士論文執筆⑧
第28回	データの収集①	第28回	修士論文執筆⑨
第29回	データの収集②	第29回	修士論文執筆⑩
第30回	まとめ	第30回	まとめ

到達目標

研究指導Ⅰ：経営学の学術論文、経営学研究の考え方ややり方について理解できる

研究指導Ⅱ：経営学の学術論文が執筆できる

履修上の注意

特になし。

評価方法

研究指導Ⅰ：課題・レジュメの内容と議論への貢献により評価します

研究指導Ⅱ：研究・論文執筆の理論的理解と完成した修士論文を評価します。

テキスト

受講生の研究テーマを勧案し決めます。

授業概要

<研究指導Ⅰ:1年次> 修士論文の作成に向けた研究指導を行う。研究テーマの確定、研究の基礎となる基本的なテキストの理解、先行文献の収集、研究論文の構成、研究論文の作成について指導。
 <研究指導Ⅱ:2年次> 受講生が選定した論文テーマと各自の研究フレームワークに沿った研究指導を行う。特に、論文の独創性と分析力が論文に反映できるように指導する。

授業計画

<研究指導Ⅰ>		<研究指導Ⅱ>	
第1回	ガイダンス：国際会計の意義と動向	第1回	論文の章立ての詳細化(1)
第2回	研究テーマの選定のための文献収集(1)	第2回	論文の章立ての詳細化(2)
第3回	研究テーマの選定のための文献収集(2)	第3回	論文の章立ての詳細化(3)
第4回	研究テーマの選定のための文献収集(3)	第4回	中間報告会への準備(1)
第5回	研究テーマの選定とロードマップの作成	第5回	中間報告会への準備(2)
第6回	基本的な文献の輪読と理解(1)	第6回	中間報告会への準備(3)
第7回	基本的な文献の輪読と理解(2)	第7回	中間報告会の問題点の整理と反省
第8回	基本的な文献の輪読と理解(3)	第8回	論文作成の見直し(1)
第9回	基本的な文献の輪読と理解(4)	第9回	論文作成の見直し(2)
第10回	基本的な文献の輪読と理解(5)	第10回	論文作成の見直し(3)
第11回	基本的な文献の輪読と理解(6)	第11回	論文作成の見直し(4)
第12回	基本的な文献の輪読と理解(7)	第12回	論文作成の見直し(5)
第13回	基本的な文献の輪読と理解(8)	第13回	論文作成の見直し(6)
第14回	基本的な文献の輪読と理解(9)	第14回	論文の作成経過と討論(1)
第15回	基本的な文献の輪読と理解(10)	第15回	論文の作成経過と討論(2)
第16回	既存研究の整理と分析検討(1)	第16回	論文の章立ての再確認
第17回	既存研究の整理と分析検討(2)	第17回	論文作成経過の報告(1)
第18回	既存研究の整理と分析検討(3)	第18回	論文作成経過の報告(2)
第19回	既存研究の整理と分析検討(4)	第19回	論文作成経過の報告(3)
第20回	既存研究の整理と分析検討(5)	第20回	中間報告会への準備(1)
第21回	研究に関する構想の作成(1)	第21回	中間報告会への準備(2)
第22回	研究に関する構想の作成(2)	第22回	中間報告会への準備(3)
第23回	研究に関する構想の作成(3)	第23回	中間報告会の問題点の整理と反省
第24回	ロードマップの再検討と研究経過の報告	第24回	修士論文の完成
第25回	論文の草稿の作成(1)	第25回	修士論文の検討と部分的修正(1)
第26回	論文の草稿の作成(2)	第26回	修士論文の検討と部分的修正(2)
第27回	論文の草稿の作成(3)	第27回	修士論文の報告と討論(1)
第28回	論文の草稿の作成(4)	第28回	修士論文の報告と討論(2)
第29回	論文の草稿の作成(5)	第29回	修士論文の最終チェック
第30回	論文作成経過の報告	第30回	修士論文の問題点と今後の課題の確認

到達目標

- ・会計理論及び制度の理解を深化させることができる。
- ・論文作成に必要な会計理論を習得し、修士論文を完成させることができる。

履修上の注意

- ・研究テーマに関する基本的な理解を身につけること。
- ・研究の方向性を明確にすること。

評価方法

<研究指導Ⅰ>レポート報告(60%)、講義中の議論(40%)によって総合的に判定する。
 <研究指導Ⅱ>修士論文の完成度に依りて評価する。

テキスト

研究・指導上必要なテキストや参照文献などを適宜、指示する。

授業概要

<研究指導Ⅰ:1 年次> 修士論文の作成に向けた研究指導を行う。研究テーマの確定、研究の基礎となる基本的なテキストの理解、先行文献の収集、研究論文の構成、研究論文の作成について指導を行う。
 <研究指導Ⅱ:2 年次> 受講生が選定した論文テーマと各自の研究フレームワークに沿った研究指導を行う。特に、論文の独創性と分析力が習得できるように指導する。

授業計画

<研究指導Ⅰ>		<研究指導Ⅱ>	
第1回	ガイダンス：国際会計の意義と動向	第1回	論文の章立ての詳細化(1)
第2回	研究テーマの選定のための文献収集(1)	第2回	論文の章立ての詳細化(2)
第3回	研究テーマの選定のための文献収集(2)	第3回	論文の章立ての詳細化(3)
第4回	研究テーマの選定のための文献収集(3)	第4回	中間報告会への準備(1)
第5回	研究テーマの選定とロードマップの作成	第5回	中間報告会への準備(2)
第6回	基本的な文献の輪読と理解(1)	第6回	中間報告会への準備(3)
第7回	基本的な文献の輪読と理解(2)	第7回	中間報告会の問題点の整理と反省
第8回	基本的な文献の輪読と理解(3)	第8回	論文作成の見直し(1)
第9回	基本的な文献の輪読と理解(4)	第9回	論文作成の見直し(2)
第10回	基本的な文献の輪読と理解(5)	第10回	論文作成の見直し(3)
第11回	基本的な文献の輪読と理解(6)	第11回	論文作成の見直し(4)
第12回	基本的な文献の輪読と理解(7)	第12回	論文作成の見直し(5)
第13回	基本的な文献の輪読と理解(8)	第13回	論文作成の見直し(6)
第14回	基本的な文献の輪読と理解(9)	第14回	論文の作成経過と討論(1)
第15回	基本的な文献の輪読と理解(10)	第15回	論文の作成経過と討論(2)
第16回	既存研究の整理と分析検討(1)	第16回	論文の章立ての再確認
第17回	既存研究の整理と分析検討(2)	第17回	論文作成経過の報告(1)
第18回	既存研究の整理と分析検討(3)	第18回	論文作成経過の報告(2)
第19回	既存研究の整理と分析検討(4)	第19回	論文作成経過の報告(3)
第20回	既存研究の整理と分析検討(5)	第20回	中間報告会への準備(1)
第21回	研究に関する構想の作成(1)	第21回	中間報告会への準備(2)
第22回	研究に関する構想の作成(2)	第22回	中間報告会への準備(3)
第23回	研究に関する構想の作成(3)	第23回	中間報告会の問題点の整理と反省
第24回	ロードマップの再検討と研究経過の報告	第24回	修士論文の完成
第25回	論文の草稿の作成(1)	第25回	修士論文の検討と部分的修正(1)
第26回	論文の草稿の作成(2)	第26回	修士論文の検討と部分的修正(1)
第27回	論文の草稿の作成(3)	第27回	修士論文の報告と討論(1)
第28回	論文の草稿の作成(4)	第28回	修士論文の報告と討論(2)
第29回	論文の草稿の作成(5)	第29回	修士論文の最終チェック
第30回	論文作成経過の報告	第30回	修士論文の問題点と今後の課題の確認

到達目標

- ・グローバル化に伴う国際会計理論及び制度の理解
- ・論文作成に必要な会計理論の習得と修士論文の完成

履修上の注意

- ・研究テーマに関する基本的な理解を身につけること。
- ・研究の方向性を明確にすること。

評価方法

<研究指導Ⅰ>レポート報告(60%)、講義中の議論(40%)によって総合的に判定する。
 <研究指導Ⅱ>修士論文の完成度に応じて評価する。

テキスト

研究・指導向けにテキストや参考文献などを適宜、指示する。